

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク  
研究紀要

U  
N  
I  
T  
E  
D

# 瀬波



2025  
第12号

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク  
研究紀要 第12号

niwa

瀬波

## 目次

### 令和6年度活動記録

|               |   |
|---------------|---|
| 青塚古墳史跡公園      | 1 |
| 木之下城伝承館・堀部邸   | 2 |
| 歴史の里・しだみ古墳群   | 3 |
| その他ニワ里ねっと自主事業 | 4 |
| その他文化遺産関連受託事業 | 5 |
| 活動年表          | 6 |

### 研究論考

|                                                         |    |
|---------------------------------------------------------|----|
| 濃尾平野・2世紀の集落ストーリー<br>赤塚 次郎                               | 8  |
| 隠士「聖阿」によって造立された<br>入鹿切れ供養地藏・供養塔（犬山市羽黒）<br>について<br>近藤 健一 | 18 |
| 赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見<br>—犬山市八幡地区を事例に—<br>兼松 泰弘          | 26 |
| 羽黒村・池野村における近現代の瓦製造<br>望月 友恵                             | 44 |

### 歴史探訪

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 西南戦争を戦った<br>小牧市出身兵士の墓を訪ねて<br>服部 哲也 | 40 |
|------------------------------------|----|

|      |    |
|------|----|
| 会員募集 | 49 |
|------|----|



## 青塚古墳史跡公園

活用・管理業務を犬山市より委託を受け実施。羽黒地区をテーマにした企画展を開催、展示に合わせて現地の試掘調査も行った。子ども向けワークショップでは、羽黒小学校にて石棺を復元するワークショップを行った。青塚古墳を見守る会との協働で古墳草刈り活動を継続して実施するとともに、史跡の整備を学ぶ研修会も実施した。

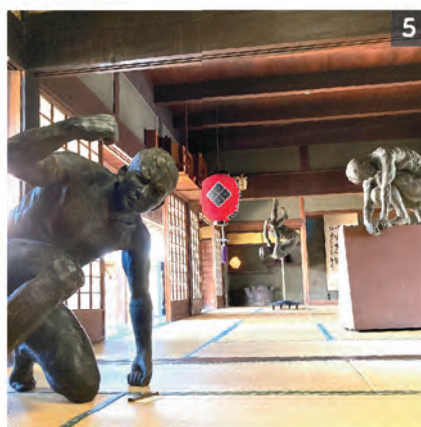
1. 草刈りボランティア活動 2. あおつか歴史講座④「みんなで羽黒の石棺をつくろう」 3. 小学校の青塚古墳見学  
4. あおつか歴史講座③「羽黒の文化遺産をめぐる」 5. 青塚古墳を見守る会研修会 6. 草刈りボランティア活動



## 木之下城伝承館・堀部邸

堀部邸の空間を生かし、「高野真吾彫刻展 in 堀部邸」を夏に開催。トークショーなども同時に行った。「猪之子座」では毎年恒例となっている落語や講談、音楽コンサートを開催し、多くの来場者で賑わった。冬には、東之宮古墳の鏡チョコワークショップを開催した。

1. 猪之子座「上方講談をたっぷり！」 2. 「鏡チョコレート」を作ろう 3. 猪之子座「上方落語 九雀亭」  
4. 猪之子座「美しき日本の音楽コンサート」 5. 企画展「高野真吾彫刻展 in 堀部邸」 6. 猪之子座「健康お笑い隊 年金トリオ」



## 歴史の里・しだみ古墳群

「夜の音楽会 in しだみ古墳群」は雨天のため、館内にてステージを上演、たくさんの方にご来場いただきました。しだみゅー古墳散策は、小幡エリアや見晴台遺跡周辺などを散策。歴史講演会には各方面から講師をお迎えし、たくさんの方にご来場いただいた。

1. 夜の音楽会 in しだみ古墳群 2. 「子ども研究員養成講座」 3. 歴史講座「お庭に埴輪プロジェクト」  
4. しだみゅー歴史講演会「鈴鏡・倭鏡を鑄込む」 5. しだみゅー古墳散策「小幡の古墳と城」 6. しだみゅー闇夜体験

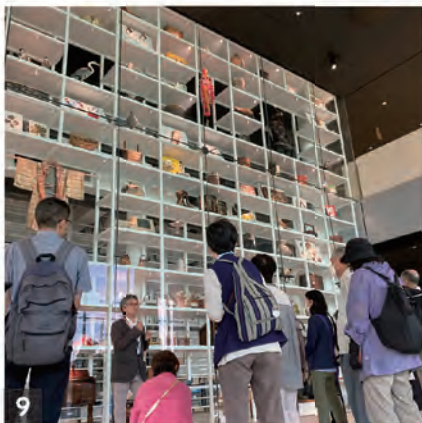


## ニワ里ねっと自主事業

令和6年度は岩倉市エリア・岩倉街道にスポットを当て、ニワ里カレッジやニワ里ウォーキングを実施。「入鹿切れ」講座も江南市・岩倉市の施設で開催した。バスツアーでは伊賀や大和などに出向いた。

1. 石上げ祭ニワ里連 2. パネル展「入鹿切れ」ギャラリートーク 3. ニワ里カレッジ「弥生時代の大地遺跡」  
4. ニワ里サイクリング同好会 5. 楽田小学校出前授業「災害の歴史を知ろう」 6. ニワ里バスツアー大和たび  
7. ニワ里ウォーキング 8. ニワ里バスツアー伊勢国・北伊賀 9. ニワ里バスツアー 豊田市博物館





## その他 文化遺産関連受託事業

自治体など委託を受け文化遺産関連事業を実施。犬山市では東之宮古墳にて土上げ祭ワークショップを実施、今年度が最終年度。尾張旭市では企画展を2回開催した。大垣市では荒尾南遺跡に関連する講座を2日にわたって実施した。

- 1.【尾張旭市】企画展「丘を越え行こうよ」 2.【大垣市】荒尾南遺跡歴史講演会  
3.【犬山市】土上げ祭ワークショップ



12日～令和7年3月2日：【尾張旭市】企画展「丘を越え行こうよ」

②尾張旭市スカイワードあさひ

12日：【名古屋市】しだみゅー古墳散策「南区の古墳と見晴台遺跡」

①服部哲也②桜神明社古墳・見晴台遺跡ほか③16名

16日～11月24日：企画展「青塚古墳ガイダンス館蔵品中野耕司写真展」

②青塚古墳ガイダンス

19日：赤塚理事長古希記念の会

①野島洋美ほか②堀部邸③25名

20日：【犬山市】東之宮古墳ワークショップ「古墳の石ころワークショップ」

①赤塚次郎②東之宮古墳③15名

22日：ニワ里サイクリング同好会

①古川博昭②蟹江町周辺③8名

26日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「原始・古代の玉作り」

①伊藤正人②しだみゅー③75名

## 11月

3日：【犬山市】文化財看板デザインについて検討するワークショップ②

②犬山市役所③20名

4・5日：羽黒エンゼチ試掘調査

②羽黒高橋地区③のべ12名

9日：猪之子座「美しき日本の音楽コンサート」

①長江希代子・石黒和雅・中野包裕②堀部邸③66名

10日：【名古屋市】しだみゅー秋まつり

②しだみゅー③3,683名

10日：【犬山市】犬山市防災訓練参加

②犬山西小学校

15日～令和7年1月10日：【名古屋経済大学】「内久保崇と金森長近」展示協力

②名古屋経済大学

17日：猪之子座「上方講談をたっぷり」

①旭堂南海②堀部邸③15名

18日：小学校出前授業「郷土の歴史を講談で学ぶ」

①旭堂南海②美濃加茂市蜂屋小③6年生

23日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「古墳出現期の山城南部の地域勢力と東海」

①高野陽子②しだみゅー③65名

24日：【犬山市】東之宮古墳ワークショップ「古墳の石ころワークショップ2」

①赤塚次郎②東之宮古墳③15名

## 12月

1日：ニワ里ウォーキング「岩倉街道」

①赤塚次郎②柏森駅から布袋駅③17名

4日～令和7年3月30日：企画展「地域に眠る文化遺産 in 羽黒」

②青塚古墳ガイダンス

14日：【犬山市】東之宮古墳「日の出見学」

①赤塚次郎②東之宮古墳③17名

15日：【犬山市】文化財看板デザインについて検討するWS③

②犬山市役所③10名

21日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「石工の技術」

①東海古墳時代研究会共催②しだみゅー③63名

22日：あおつか歴史講座①「羽黒エリアのやさしものづくり」

①望月友恵②青塚古墳③29名

## 1月

16日：小学校出前授業「入鹿切れ」

①望月友恵②楽田小学校③4年生

17日：学校出前授業「栗栖地区の文化遺産」

①望月友恵②栗栖野外活動センター③8名

18日：あおつか歴史講座②「尾張の縄文時代」

①瀬瀬茂②青塚古墳③46名

25日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「鈴鏡・倭鏡を鋳込む」

①赤塚次郎②しだみゅー③87名

26日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト

①清水美香子ほか②愛知県陶磁美術館③20組30人

26日：【犬山市ボラ連】ボランティアのつどい参加

②南部公民館

## 2月

2日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト

①清水美香子ほか②しだみゅー③20組30人

5日：東之宮古墳人物禽獣鏡のチョコレートを作る

①浅見貴子②堀部邸③4名

9日・15日：青塚古墳草刈りボランティア

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③のべ58名

22日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「東海の鍛冶、近畿の鍛冶」

①真鍋成史②しだみゅー③90名

23日：あおつか歴史講座③「羽黒の文化遺産をめぐる」

①羽黒コミュニティとの共催②羽黒地区③32名

28日：小学校出前授業「上街道」

①望月友恵・服部哲也②楽田小周辺③3年生

## 3月

1日：あおつか歴史講座④「みんなで羽黒の石棺をつくろう」

①望月友恵②羽黒小はぐろんルーム③8名

2日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト

①清水美香子・人見誠マルセルほか②しだみゅー

③20組30人

6日：ニワ里バスツアー大和たび「和爾・物部氏の里を訪ねる」

①赤塚次郎②和爾下神社古墳・柿本寺跡ほか③23名

8日：【犬山市】東之宮古墳修復プログラム「土あげ祭」

①赤塚次郎・中野金弘・夢舞台ほか②東之宮古墳③19名

9日：ニワ里カレッジ「文化遺産を防災に活かす」

①服部哲也②おさや糸店③16名

15日：【大垣市】荒尾南遺跡歴史講演会

①樋上昇②宇留生地区センター③43名

16日：【大垣市】東町田墳墓群歴史講演会

①原田幹・石井智大②青墓地区センター③37名

22日：【名古屋市】しだみゅー歴史セミナー「白鳥塚古墳の時代」

①深谷淳・加藤一郎・仁藤敦史②守山文化小劇場③251名

22日～令和8年3月1日：【尾張旭市】企画展「尾張旭市の馬の塔」

②尾張旭市スカイワードあさひ

25日：青塚古墳を見守る会研修会「古墳を訪ねる①」

①服部哲也②味美二子山古墳・志段味古墳群ほか③20名

## ■そのほかの事業

文化遺産カード

・新潟県津南町において新規発行。

・令和6年8月31日をもって文化遺産カード事業終了。商標登録も6月27日で終了。

5月 研究紀要「遷波11号」発行

6月 遷波里 booklet.007「入鹿切れ」発行

5月～3月（隔月）

会員通信「さとの四季だより」80号～85号発行

## ■管理・運営施設の年間入場者数

【犬山市】青塚古墳史跡公園入館者数

12,453名（昨年度14,052名）

校外学習19校（昨年度22校）合計979名

【犬山市】木之下城伝承館・堀部邸入館者数

4,957名（昨年度5,507名）

【名古屋市】体感！しだみ古墳群ミュージアム入館者数

110,345名（昨年度98,629名）

## ■ご寄付

・（財）タイム技研社会貢献委員会 様 斜面用草刈り機1台

・個人会員様2名よりご寄付

・堀部邸・青塚古墳ガイダンス 施設での寄付金

# 2024.4 ▶ 2025.3 令和6年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」  
①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

青色：ニワ里ねっと自主事業・共催・協力事業  
茶色：文化遺産関連受託事業

## 4月

2日～5月26日：企画展「青塚古墳の周辺の動物」  
②青塚古墳ガイダンス

13日～5月19日：青塚古墳に鯉のぼり

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳

14日：ニワ里カレッジ「岩倉市の文化遺産」

①山内宏之②青塚古墳③20名

17日：丹羽の里座学会「神話の里・淡路たび」

①赤塚次郎②堀部邸

19日：小学校出前授業「地域の古墳を学ぶ」

①望月友恵②池野小学校③4年生

27日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「王陵の埴輪と尾張の埴輪」

①東影悠②しだみゅー③93名

28日：ニワ里サイクリング同好会

①古川博昭②岩倉市周辺③12名

## 5月

6日：【名古屋市】しだみゅー春まつり

②しだみゅー③3,043名

12日：ニワ里ウォーキング

①赤塚次郎②大地遺跡・下田南遺跡ほか③7名

15日：丹羽の里座学会「木曾街道と犬山街道」

①高橋幸子②堀部邸

18日：ニワ里ねっと総会

②堀部邸

19日：青塚古墳まつり（雨天中止）

②青塚古墳

22日：犬山市校長会にて青塚古墳PR活動

①服部哲也・望月友恵②犬山市役所③市内小学校長

25日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「埴輪を観て、技を知る」

①酒井将史②しだみゅー③76名

25日：青塚古墳草刈りボランティア

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③35名

## 6月

1日：【名古屋市】しだみゅー闇夜体験

②しだみゅー③15組46名

2日～7日：パネル展「入鹿切れ」

①江南フューチャーセンターと共催②布袋駅東複合公共施設2階フリースペース

2日：パネル展「入鹿切れ」ギャラリートーク

①望月友恵・松本達也②布袋駅東複合公共施設2階フリースペース③のべ20名

5日～7月15日：企画展「青塚古墳を詠む」俳句展

①つれづれ句会②青塚古墳ガイダンス

8日：青塚古墳草刈りボランティア

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③18名

9日：【名古屋市】しだみゅー古墳散策「小幡の古墳と城」

①服部哲也・山田暁②守山城・瓢箪山古墳ほか③18名

15日：遷波史楽座「『入鹿切れ』語りと読み聞かせで学ぶ」

①中野包裕・道家晴規・望月友恵・さくらの里かたつむり

②岩倉市おさや糸店③51名

18日：入鹿切れ慰霊

②入鹿池慰霊碑前③3名

19日：丹羽の里座学会「史記を読む5 始皇本紀、陳翔世家」

①山田茂樹②堀部邸

22日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「木製農具の変化は何を示すか？」

①樋上昇②しだみゅー③81名

26日：大縣神社正式参拝

②大縣神社③10名

29日：ニワ里カレッジ「岩倉街道 Map と原風景」

①赤塚次郎②青塚古墳③34名

30日：猪之子座「健康お笑い隊 年金トリオ」

①年金トリオ②堀部邸③45名

## 7月

2日：小学校出前授業「楽田城を歩く」

①望月友恵・服部哲也②楽田小周辺③6年生

3日：ニワ里バスツアー「豊田市博物館など」

①高橋健太郎②豊田市博物館、豊田市民芸館③17名

17日～9月1日：企画展「行ってみよう！学校のそばにある遺跡」

②青塚古墳

17日：丹羽の里座学会「中央構造線から糸魚川」

①吉田さよ子②堀部邸

25日：青塚こども教室「青塚古墳を見学しよう！」

①望月友恵②青塚古墳③5名

27日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「弥生・古墳時代のモノづくりと道具」

①田中謙②しだみゅー③79名

30日：小学校教師巡見

①服部哲也②小牧山城ほか③楽田小先生18名

31日・8月7日：【名古屋市】しだみゅー子ども研究員

①服部哲也・安田彩音②しだみゅー③5名

## 8月

4日：石上げ祭参加

②尾張富士大宮浅間神社③14名

17日：ニワ里カレッジ「弥生時代の大地遺跡」

①永井宏幸②おさや糸店③42名

18日：青塚こども教室「青塚古墳を見学しよう！」

①望月友恵②青塚古墳③2名

18日：みやげ話の会

①八神夏実「スペイン旅行記」川村和恵「韓国旅行記」②青塚古墳③12名

21日～9月1日：企画展「高野真吾彫刻展 in 堀部邸」

②堀部邸

22日：青塚こども教室「古代の布を編んでみよう」

①望月友恵②青塚古墳③10名

24日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「尾張の銅鐸」

①進藤武②しだみゅー③87名

31日：「高野真吾トーク & ライブコンサート」

①高野真吾②堀部邸③のべ53名

31日：【名古屋市】しだみゅー夜の音楽会

①包金鐘・佐藤光・アンジェロ・アクィリーニ・A.D. クリステアンほか②しだみゅー③200名

## 9月

14日：青塚古墳草刈りボランティア

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③30名

15日：【犬山市】文化財看板デザインについて検討するワークショップ

①水内智英②犬山市役所③13団体22名

18日：丹羽の里座学会「木地師の里を歩く」

①伊藤宏樹②堀部邸

28日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「賀茂の古墳時代」

①森泰通②しだみゅー③68名

29日：猪之子座「上方落語九雀亭」

①桂九雀・桂九寿玉ほか②堀部邸③15名

## 10月

3日：ニワ里バスツアー「伊勢国、北伊賀を中心に」

①穂積裕昌②勘定塚古墳、伊賀国庁跡、御墓山古墳ほか③18名

5日：ニワ里カレッジ「尾張の中世城館 岩倉城」

①鈴木正貴②おさや糸店③32名

## 濃尾平野・2世紀の集落ストーリー

NPO法人 古代遷渡の里・文化遺産ネットワーク

赤塚 次郎

### 1. はじめに

木曽三川が流れ落ちる広大な濃尾平野、弥生時代中期には河川流域を中心として、多くの集落遺跡が確認されており、豊かな文化を築き上げていた。だが中期後葉ごろになると、温暖な環境が変貌し寒冷化に向かう。そして遺跡調査の中で指摘されてきたのは、集落の状況が大きく変貌、集落といわず墳墓の形態や風習までも大きく変わっていくのではないかと推測できるような構造的ともいえる変化が見られる。濃尾平野では「高蔵式」と呼ばれる土器様式の間に認められる。

ここではその高蔵式以降の「弥生後期」およびその後の「古墳早期」にかけての集落景観を基軸に、その風景の変貌過程をとりまとめた。取り扱う時期はおおむね西暦一・二世紀。そして集落等の遺跡で

の時系列の動態のなかで見えてきているのは、二世紀前葉での大きな変化であった。それは一つの画期として評価され、次なる時代である古墳早期に突入していく契機という位置づけも可能であろう。この点はすでに漠然とした内容と具体的な土器拡散・前方後方墳の動きとしてまとめた経緯がある（赤塚2009）。しかしそこに至る過程やその本質的な意味等についてはいささか不問に期してきた。そこであらためてその具体的な様相を発掘調査成果などから俯瞰してみたい。まずは伊勢湾との海岸部に存在する東海屈指の巨大集落遺跡、朝日遺跡を訪ねる所からはじめよう。

### 2. 洪水層（TISA層）高蔵式

愛知県名古屋市区から清須市にかけて広がる「朝日遺跡」、弥生中期に大規模な集落遺跡へ変貌し

た朝日遺跡であるが、中期末に集落を襲った洪水層（TISA層）により集落は大きく被災し、破滅的な状況になる。集落の中央に存在する「谷」を埋め尽くした砂・シルト層が調査により報告されている。この洪水層は、東海各地の集落景観に大きな影響を与えていた可能性が高い。

ところでこの段階で朝日遺跡はどのように集落景観を変貌させたのかをまとめておくと、まず南区画とされる大きな居住空間が一気に縮小し、約二百メートルほどの集落景観（南区画）に落ち着く。環濠を掘削し景観を整えたのは八王子古宮Ⅱ式期と思われる。八王子古宮Ⅰ式期の状況が不明瞭で、集落の復興に手間取っていたと想定したい。しかしここでなんとか集落景観を整え復興を完成させる。南区画の新しい景観への手順を見ていくと、1）集落南に朝日銅鐸埋納地を設定し（濃尾平野低地部では銅鐸終焉）、近接して東西南北軸をもつ特殊な方形周溝墓（SZ162）を造営する。2）それに合わせて埋納地を避けるように二重の環濠を迂回させ、集落南入口を併設させる。従来にない複雑な曲

線をもつ環濠集落へと変貌した。ただ注意したいのは北区画はほとんど変化せず、さらに内側に環濠を新たに掘削し、補強しているようにも思われる。北の区画をさらに防御しようとする志向性すら感じられる（赤塚2024）。

さてこの最後の朝日遺跡弥生後期の集落景観であるが、その後は山中式期まで継続したと想定できる。詳しく見ていくと、個別の土器・竪穴建物等の遺構は古宮Ⅱ式から山中Ⅰ式期までが多く、山中Ⅱ式期には激減する。一見すると八王子古宮式から山中Ⅰ式にかけて安定した集落景観が維持されたようにも見えるが、本来の人の動きが、山中Ⅱ式期には急速に消失しつつある点は動かない。一方で濃尾平野全体を見わたすと、この時期は小規模な集落が長く継続することなく、場所を変えながら分布は散在的、集落は短期間を基本して営みを繰り返すような景観が見えてくる。そこには朝日遺跡のような中期以来の環濠をめぐる風景は見えてこない。また銅鐸の使用も濃尾平野の平野部では八王子古宮式をもって停止したようだ。この点から見えてくるものは濃尾平野河川流域

の多くの遺跡が西暦一世紀の間に災害に遭遇し、特に平野部ではしばらく個別の小規模な復興が繰り返されていたと想定しておきたい。

さて朝日遺跡ではやがて廻間Ⅰ式期を迎えると集落そのものが事実上解体、人々は何処へと去っていくのである。朝日遺跡の終焉は、廻間Ⅰ式初頭段階からはじまる点は動かない。それはどのような要因に基づくものであろうか。

まとめると濃尾平野では一世紀八王子古宮式を契機に大規模集落は消失、高蔵式後葉に勃発した大規模な自然災害に小規模集落単位で個々対処しつつ、地域社会の立て直しに立ち向かっていた。低地部では多くの集落は、一定の空間に定着するには至っていない状況が続いていたものと思われる。

### 3. 一宮市八王子遺跡

次に二世紀の集落動向を考える上で必要な一宮市八王子遺跡を訪ねてみよう。犬山扇状地と低湿地帯との境部に立地し、現在の標高は六メートルほど。集落の概要をまとめておく。1) 弥生前期に環濠集落が誕生する。中央部に存在する窪地状の谷

地形を挟んで右岸(北側)で中期の朝日式・貝田町式にかけて集落がはじまる。2) 高蔵式期になるとその場所が「墓域」に変貌し、居住域は調査区西側に移動したものと考えられている。注目したいのは南側の谷地形周辺は旧河道による活発な動きが見られ、遺構は確認できていない。ここまでが弥生前・中期の右岸での動向である。そして劇的な変化が生み出される。3) 人々の生活痕跡が北側から左岸の南側へと大きく変化。ここでは高蔵式期末葉ごろに一旦生活の痕跡が見えにくくなる。これを朝日T・S A層と同じ洪水層の堆積、およびその強い影響と推測しておこう。

### 4. 八王子古宮式から廻間Ⅰ式

さていよいよ弥生後期の八王子遺跡の具体像を見ていきたい。まず八王子遺跡の調査区内では、右岸(北側)における遺構群は高蔵式で終焉し、次の八王子古宮式になると左岸(南側)に生活の場が移る。(図1) 1) 八王子古宮式期には、竪穴建物を中心に数棟の建物が南岸に沿う形で散在する傾向が読み取れる。建物の重複関係から幾つかの定住者集団

の姿が見えてくる。

2) その後の山中式期においてもその延長として、さらに竪穴建物が僅かに散在するが、極めて小規模で定住傾向すらなかなか読み取れない。ただ溝の掘削など一定の土地利用を志向していたものと推測できる。問題は廻間Ⅰ式の登場である0段階。劇的な遺構群が創り出された。

3) 全く放置されていた、北岸のかつての中期集落・墓域空間に突如、「長方形区画」が誕生する。中央に大型建物S B 10が存在し、溝で囲まれたその周りに集落建物をイメージさせる遺構はいっさい存在しない。つまり居住を意味しない大きな空域が造られた事になる。加えて長方形区画南西エリアには大量の土器を伴う土坑が存在する。おおむね廻間Ⅰ式0・1段階のものが中心であり、何らかの特別な祭事が執り行われた。それは非常に限られた時間での一過性の施設とも想定できる。加えてその南側の岸には大溝が存在し、コンコンと湧く泉、S X 0 5 井泉が整えられる。注目したいのがその周辺から大量の小型精製土器を含む土器群が見つかった点である。

4) 谷をはさんで南側には大きな長方形の区画が設定された。S X 1 0 0 の方形壇と掘立柱建物・竪穴建物群が密集する場所が造られている。谷は急速に砂層によって埋め尽くされ大きな空間が造られようとしていた。そして廻間Ⅰ式2・3段階になると北側の長方形区画内では石杵が見つかったS B 0 4 以外の遺構がほとんど見られず、ここでの活発な祭祀活動は停止する。ただ井泉でのお祭りはしばらく継続し、多量の土器群が散在している。それに変わって南側の区画内に竪穴建物が集積し、集住する空域が生み出されている。

5) 廻間Ⅰ式4段階からⅡ式前半期にかけて急激に遺構が見られなくなり、わずかに竪穴建物が数棟散在するのみとなる。ただし井泉S X 0 5のお祭りは継続している点は注目したい。そしてⅡ式後半からⅢ式にかけての遺構は認められず、この空域が再び放棄され集落景観は終焉。以降安定的な遺構配置は認められず、四世紀前半の松河戸Ⅰ式前半期になると、南側に僅かに竪穴建物が見られるにすぎない。ただ面白いのは井泉S X 0 5・溝周辺に再び遺物の散布が確認でき、この場所が何らかの

特殊な場所として認識されそれが長く継承されていた点にある。それはこの地が特別な場所として意識され、人々の間に記憶遺産として残された（ここでは以下こうした特定の場所を記憶エリアと呼んでおこう）。

## 5. 250年の記憶遺産

ここであらためて愛知県一宮市「八王子遺跡」の調査から見えてくる風景をまとめておきたい。

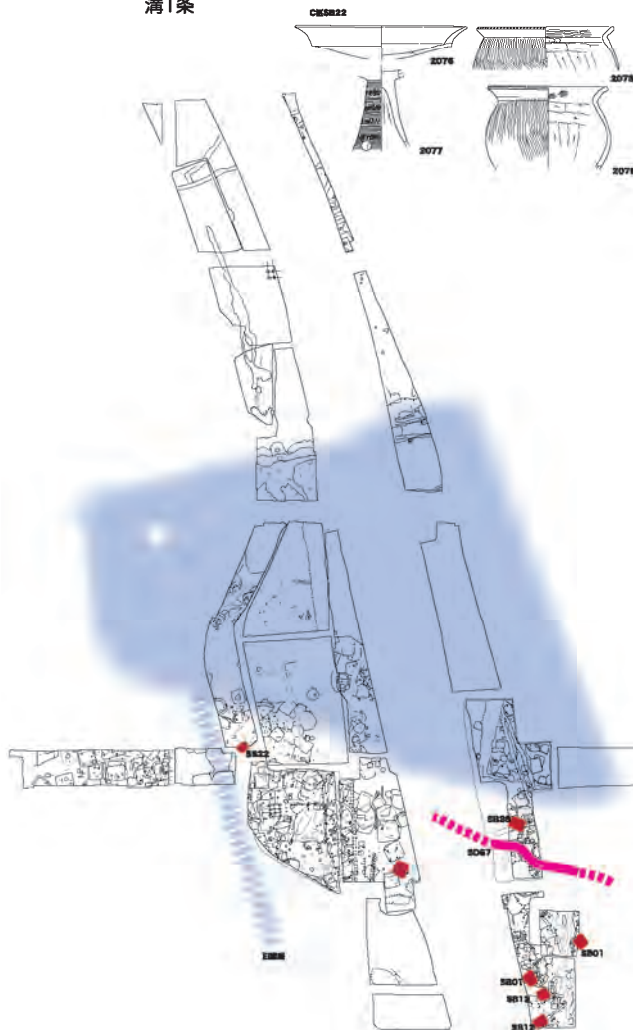
1) まずは河道右岸に居住域として集落がはじまり、中期前葉に環濠集落が登場する。そこが中期末には墓域に変貌し、この初段階で八王子銅鐸が墓域内の特別な場所に「埋納」された。その後ここで集落が一旦途絶える。（河道の砂層堆積・洪水）

2) 八王子古宮・山中式期に部分的な集落景観を復旧させるが、集落の場所が微妙に移動を繰り返し、その規模においても小規模であり、集落として安定的な状況は見えてこない。

3) そしてやがて二世紀前葉に突如、八王子遺跡は大変貌を遂げる。かつての集落・墓域に「長方形区画」を造り、南側には区画内に一時的に建物を集住させる。特殊な集落景観

### 山中式期

谷の南岸及び調査区南端部にわずかに建物が散在する。  
竪穴建物7軒  
溝1条



### 八王子古宮式期

谷の南岸に竪穴建物群が新たに展開する  
竪穴建物28軒  
掘立柱建物1棟

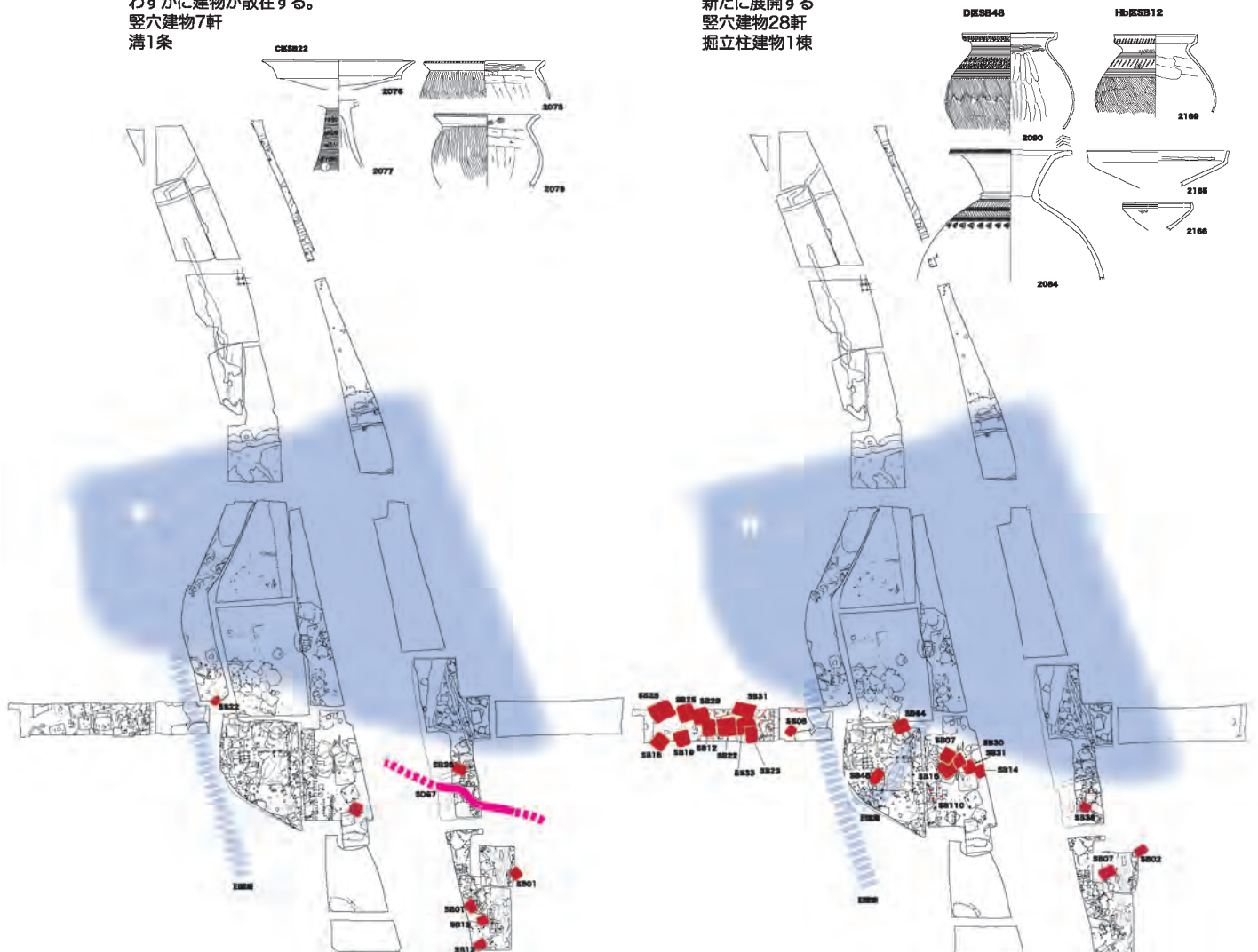


図1-1 八王子遺跡 遺構の変遷

が突如生み出された。この時、「八王子銅鐸埋納地」が何らかの記憶エリアとして継承され、その地点にあえて「長方形区画」が造営されたものと推測できる。それはまさに250年にわたって継承されてきたこの集落の記憶遺産が、二世紀前葉に再び蘇り、あらたな歴史を創り上げた事を示しているものと思われる。

この風景の激変は廻間I式登場期に起こり、そこに何か特別な出来事が存在した事を示している。人々の間に強烈な出来事性の記憶を残し、それを示す特定の場所を強く意識する志向性がうみだされた（記憶遺産）。

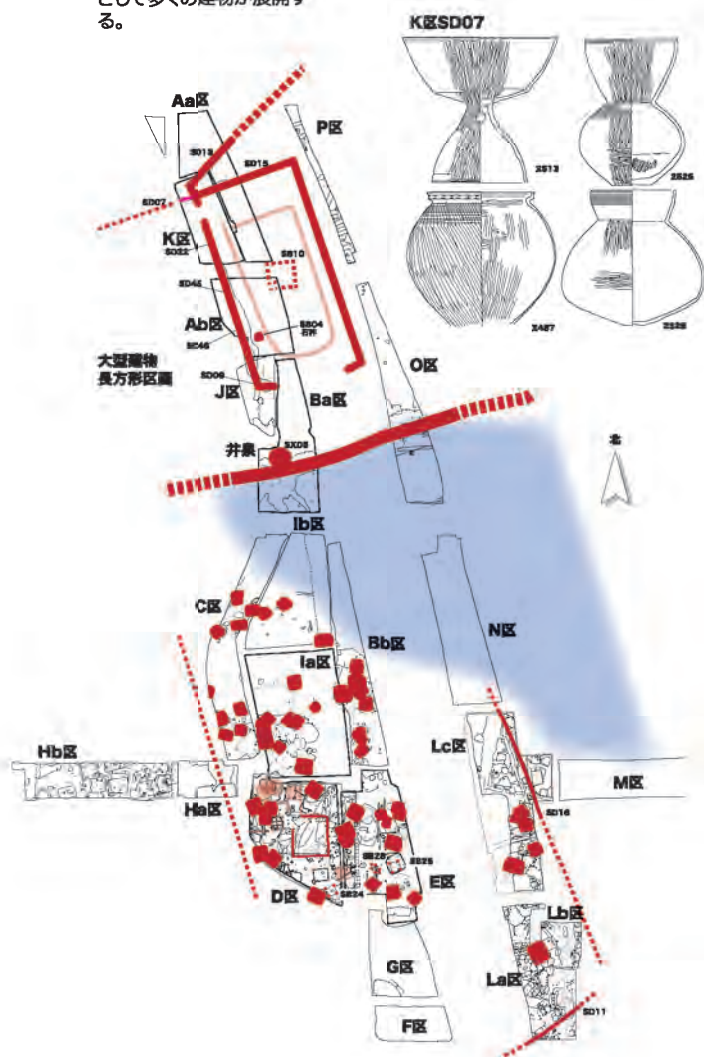
## 6. 清須市廻間遺跡

ではその時期、他の遺跡ではどうであるのかを含め確認しておきたい（図2）。

廻間I式を契機に集落が出現する事例として清須市廻間遺跡がある（赤塚1990）。この遺跡は北側に旧河道が存在し、西側には湿地帯が広がる場面に居住域と墓域が接する小規模な集落遺跡を営む。遺跡のはじまりは廻間I式0段階で、この

### 廻間I式中頃から後葉

谷の南側には南北約200m東西110mの区画が存在し、その内部に方形区画を中心として多くの建物が展開する。



### 廻間I式前半期

谷を挟んで北側には大型建物と長方形区画（40m×80m）南には掘立柱建物群と方形区画が出現する。谷の北岸には大溝NR01と井泉遺構が営まれる。

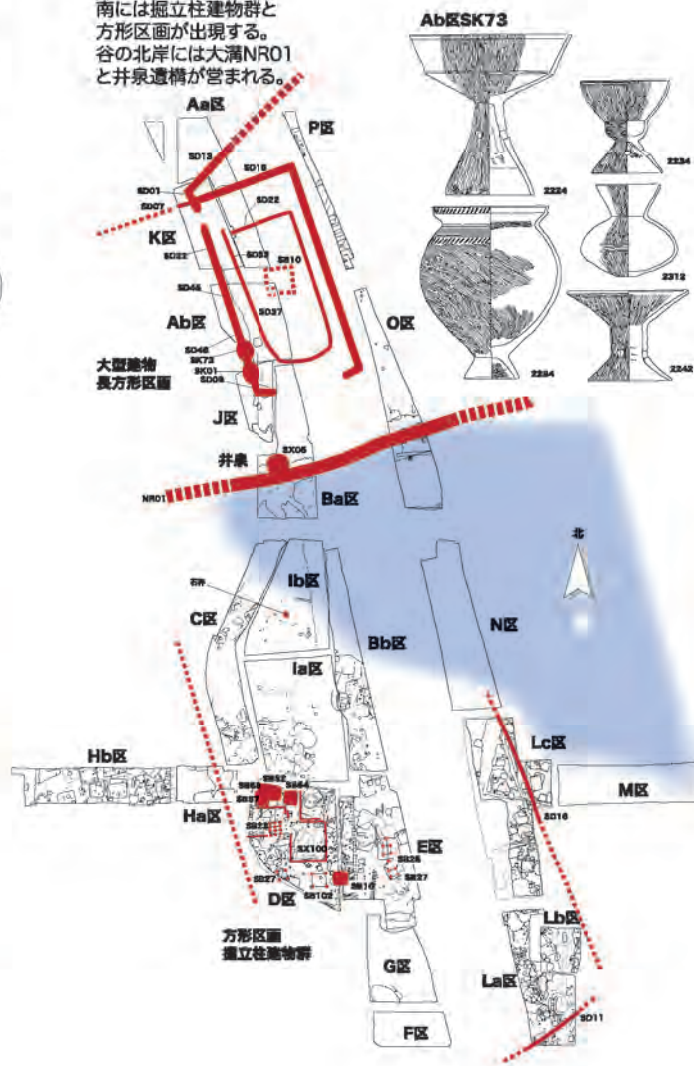


図1-2 八王子遺跡 遺構の変遷

段階で造営された前方後方型墳丘墓が象徴的な存在といえよう。居住域は散在的ではあるものの、調査区内ではほぼ中央部にまとまる傾向がある。次の廻間Ⅰ式後半期になると竪穴建物が増加し、方形墓も次々と造営されるが、Ⅱ式期になると建物は一気に北西側に偏在縮小し、旧河道岸に並び立つような景観に変わる。そしてⅢ式初頭にはさらに散在的（屋敷地配置）となり、この時期をもって遺跡は終焉を迎える。

こうした廻間遺跡から見えてくる風景は、集落のはじめに墳丘墓（前方後方型）が造られ、集落が出現する。特に廻間Ⅰ式中頃から後半期にかけて集住傾向がみられ、Ⅱ式期になると急速に小規模散在的な集落景観となる。そしてⅢ式期のはじめにムラが消失するが、基本Ⅱ式期のおかげで集落景観が大きく変化していることは明らかである。この点は一宮市八王子遺跡と同様な志向性があり、濃尾平野低地部での普遍的な集落動向と思われる。

**7 大垣市東町田遺跡・荒尾南遺跡**  
 ここでさらに濃尾平野に視野を広げ、調査成果が公表されている遺跡

### 松河戸Ⅰ式前半期

谷の南側であるLc区を中心にして竪穴建物などが展開する  
 竪穴建物8軒

### 廻間Ⅱ式前半期

谷の南側に方形区画と竪穴建物が展開する  
 竪穴建物7軒

Ba区NR013層上層

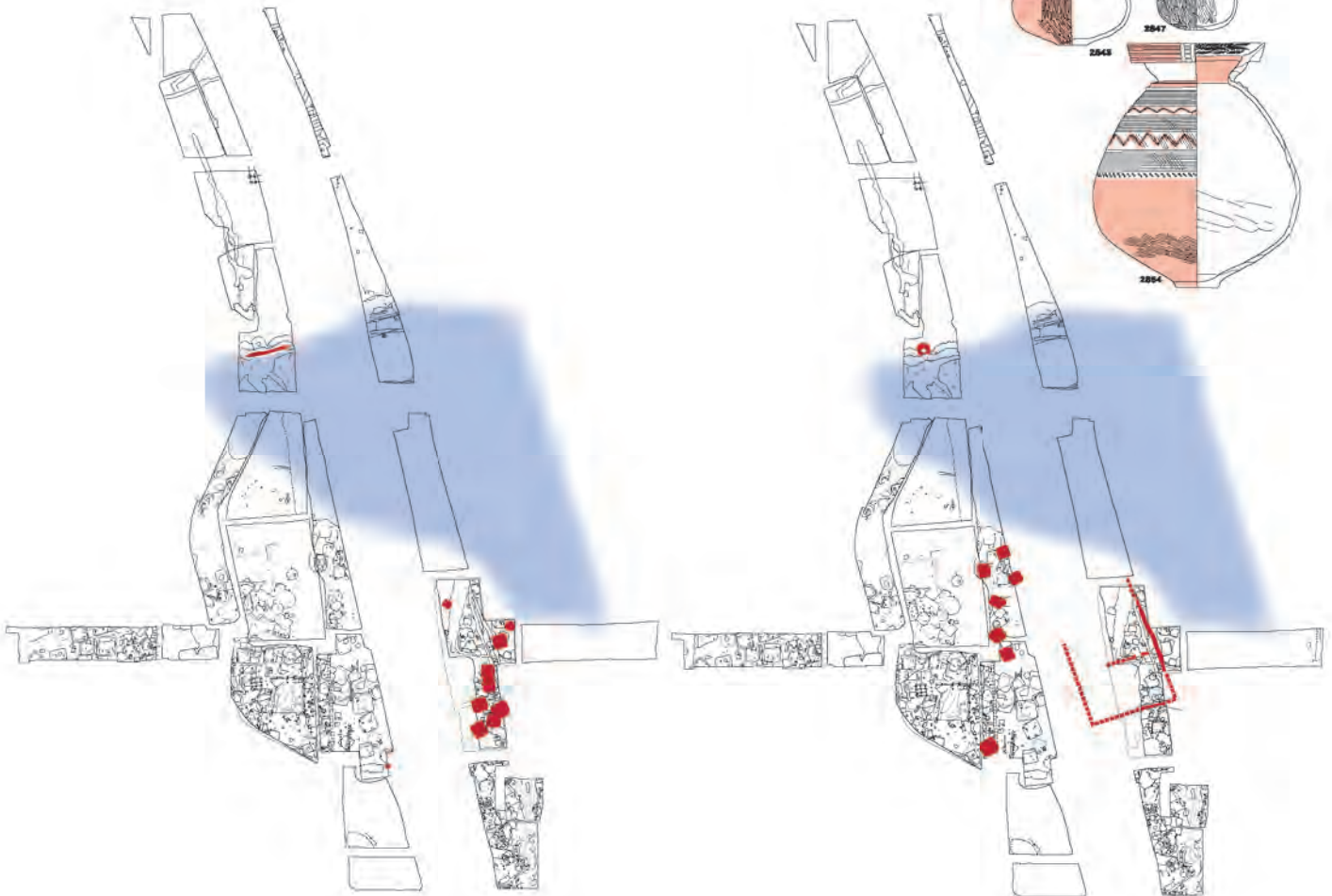
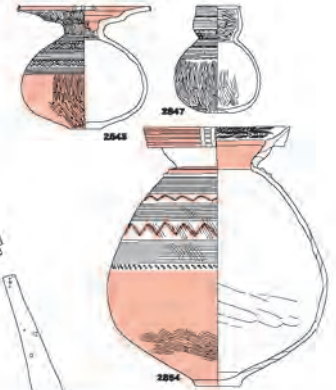


図1-3 八王子遺跡 遺構の変遷

について幾つか見ておこう。

まず最初に多くの成果が報告されている大垣市東町田遺跡（高田2016）と荒尾南遺跡（小野木2015）を取り上げたいが、ここでは中期末以降の動きを中心に見ていきたい。両遺跡では高蔵式期を一つの契機として景観が大きく変化する点はやはり同様である。東町田遺跡では集落域から墓域に変貌、八王子遺跡とよく似た傾向にある。また廻間Ⅰ式には前方後方型墳丘墓が造られ、Ⅱ式期に所属する遺構は見えてこない。八王子古宮・山中式の時

期に遺構が存在しない。現状では一旦途絶えた形となる。

次に荒尾南遺跡であるが、貝田町式から高蔵式にかけて大規模な方形周溝墓群の造営が行われた。その後、墓域が一変して居住域に変化するというきわめて興味深い成果が報告されている（図3）。居住域が墓域に変化するのとは多々見られるが、その逆は極めて乏しい。問題はその居住域がいつから整備されはじめるかという点である。報告書では「後期前半」からという指摘であるが、検出遺構・遺物の傾向を踏まえると山中式期は少なく、おおむね廻間Ⅰ

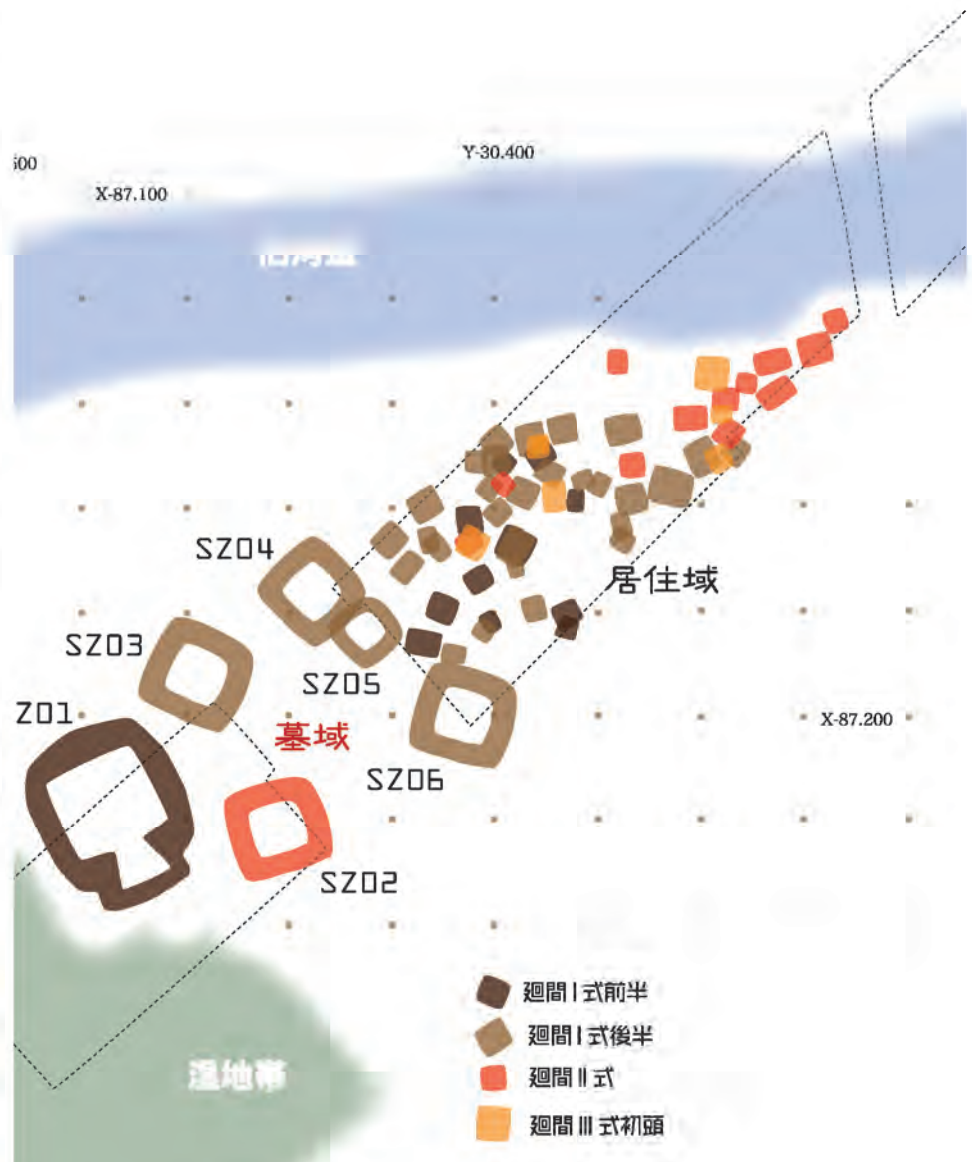


図2 廻間遺跡 遺構の変遷

式前半期ごろから竪穴建物が散在的に見られる。集住は廻間Ⅰ式後半からⅡ式期前半にかけてであり遺構配置の中心はこの時期と想定できよう。そして廻間Ⅲ式期には終焉に向かう。八王子古宮式・山中式期に併

行する土器様式の抽出と評価が難しい点はあるが、山中式後期に至る間、遺構の動向はやや不安定で明確に把握できていない。大きく見ればこの時期に所属する竪穴建物が主体となる傾向はやはり見えてこない。

## 8. 豊田市川原遺跡

全く逆の展開を見せているのが、濃尾平野ではないが西三河矢作川水系の豊田市川原遺跡である（服部2001）。この遺跡も最初の画期

はほぼ同じようであり、高蔵式期（西三河の古井式）に台地端に立地する竪穴建物が集積する集落景観が誕生した。建物の重複が著しく安定してその場面に長期的に居住する空間が認められる。しかし洪水性の砂・シルト層に覆いつくされ集落は突如消失。その後は、一変してこの場所に三十メートルクラスの大型の墳丘墓が造営される。八王子古宮Ⅰ式（川原上層Ⅰ式）になり突如、大型の墳丘墓が造られ、その内部に次々と埋葬が繰り返された。墳丘墓の設営は古宮式までであり、山中式前半併行期（川原上層Ⅱ式Ⅰ段階）に継続される。ただ内部への埋葬はおおむね廻間Ⅰ式中頃（川原上層Ⅲ式前半）まで継続され、Ⅱ式をまたずにすべて終焉する。川原遺跡も高蔵式末葉に一つの画期があり、八王子古宮式以降は墓域として活用される。遺跡の動向は廻間Ⅰ式の登場までには終焉する傾向が読み取れる。

## 9. 廻間Ⅰ式期の集落景観

以上を総合すると古墳早期・廻間Ⅰ式期の集落景観は、その集住が廻間Ⅰ式中頃を中心にはじまり、Ⅱ式期にはほぼ集住景観が消失している

可能性が読み取れる。そしてそれ以前八王子古宮式・山中式においては継続性の乏しい不安定な環境が見えてくる。どうやら廻間Ⅰ式（Ⅰ式2~4）期のみに著しい集住傾向が見られると考えておいて良いように思われる。すると従来の廻間Ⅰ式期に集落が多くなるという指摘は、具体的には廻間遺跡のような小規模集

落の個別単発的な出現と、荒尾南遺跡のような集住する居住空間への回帰という二者が組み合ったものと想定できる。さらに重要なのは一宮市八三遺跡のような特殊な儀礼空間を伴う遺跡の出現が加わる点も重要である。

点と、それ以前の八王子古宮式・山中式期では集落は小規模・不安定環境という傾向が継続された事にある。ここに廻間Ⅰ式期という社会のやや特異性を見出したい。なお岐阜県関市の砂行遺跡や深橋前遺跡・南青柳遺跡のような、環境変動への対応ともとれる「砂行型急斜面集落」（成瀬2000）が廻間Ⅰ式期（特

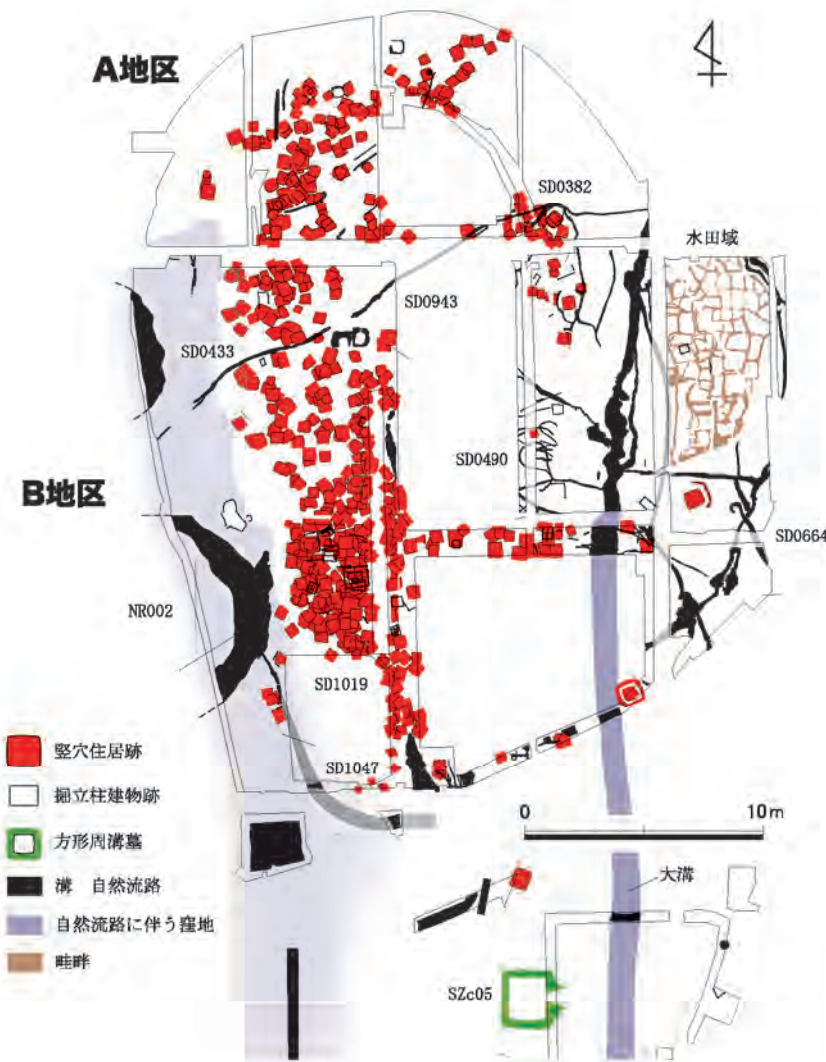


図3 荒尾南遺跡 後期前半の遺構配置

にⅠ式前半期)のみに密集する集落景観も、やはりこの時期に限る一つの特徴的な現象と追加できよう。

## 10 127年気象変動(廻間Ⅰ式前半期)

廻間Ⅰ式前半期を境に激変が起こっていた。従来より指摘されてきた弥生時代の拠点集落の解体・消失と裏腹に遺跡が増大・拡散する現象そのものを反映していると考えて良いであろう。その具体的な動きは今まで見てきたように、地域性を踏まえてやや複雑でもある。問題は、従来の時点で集落が激増し、何か大きな動きの中で集落が活性化するようなイメージを夢見ていた点にある。しかし実態はそうではない。ここでは廻間Ⅰ式前半期を中心とした限定された「集住」空間の創設という視点で再度評価しておくべきであろう。

繰り返すがその前後の時代は、集落はむしろ散在的で、安定性が乏しい状況が継続していた。廻間Ⅰ式期の特異性があらためて問題となつていくと考える。

こうした中で、注目すべき指摘として酸素同位体による気象変動がある。過去2600年間で一番降水量が多いとされる127年のイベント

が集落遺跡に大きな影響を与えたことは言うまでもない。大規模な寒冷化・湿潤化に伴い飢饉、難民、人口激減が想定されている。(中塚武2022)加えて濃尾平野では巨大地震も想定でき(中島2010)、この時期はまさに廻間Ⅰ式前半期に相当する。これらの環境評価をまずは集落激変などの大きな集落動向の主要な要因と位置付けておく必要がある。

愛知県清須市の朝日遺跡では集落が終焉し、豊田市川原遺跡でも集落景観が途絶える。一方で大垣市荒尾南遺跡では「墓域」から「集落」へ大きく変貌し、集住する傾向の集落も出現した。これらの動向は一宮市八王子遺跡の集落変遷から、廻間Ⅰ式前半期にのみほぼ限定した興味深い動きとして評価できる。しかし注意したいのは八王子遺跡と荒尾南遺跡では竪穴建物の配置とその意味に明確な違いが存在する。前者は長方形区画という特殊な祭場がキーワードとなる。地域的な特性としての砂行型急斜面集落の動向も加えておきたい。また同時にこの時期、濃尾平野の地域社会に、いくつかの祭事・道具立て(小型土器・S字甕など)

が決められていく点も見逃せない(赤塚2009)。東町田遺跡・荒尾南遺跡など、墳墓での「絵画文土器」の配置もこの延長線上に位置付けておきたい(赤塚2025)。八王子遺跡の長方形区画で見出された視点とは、特定場所が歴史的評価・伝承地となり、新たな記憶遺産の創出が企画され、何らかのイベントが実施、その記憶エリアが継続されていくという志向性が生み出された。

## 11 西暦200年前後の出来事性

廻間Ⅰ式前半期の一過性ともいえる特定の場所での集住性は、Ⅰ式後半期に継続されつつも基本2世紀末葉段階、3世紀を待たずに大きく崩れていく傾向が読み取れる。八王子遺跡がその典型であり、廻間遺跡でも小規模分散型の単位集落的な空間へと変貌していた。その時期は2世紀末葉ごろ、それは2世紀の長周期変動がやや落ち着き始めた頃でもあった。しかしやはりそれでも濃尾平野低地部では廻間Ⅱ式以降急速に遺跡が見えなくなる点は動かない。それはどういう事であろうか。

廻間Ⅰ式末からⅡ式初頭の西暦200年前後、特徴的な動きが見え

てくる。まず東海系トレース第1波として東海文化遺産の拡散現象である。そして今一つが前方後方墳の大型化、四〇メートルから六〇メートル規模の古墳がより視覚的にその存在が明確になり、各地で造営されてくる。この二つの現象は何を意味するのであろうか。残念ながらより階層化された集落や墳墓の状況は未だ具体的には見えてこない。その可能性は残しつつ、何か別次元の強い意志が働き始めた事への対応ではないかと思えてくる。

高蔵式末葉に勃発した大災害を契機に、従来の集落景観が大きく崩れ、やがて濃尾平野に「はじめの王」が誕生したと考えた(赤塚2009・2025)。具体的には岐阜市瑞龍寺山山頂墳である。この時期に北近畿経路であらたな資源・文化・技術が一気に流入する。しかし濃尾平野では被災からの脱却に大きな時間がかかり、地域再開発に手間取っていた。おそらく個別分散的対処方法による地域の立て直しに苦戦していたものと思われる。具体的に見てきた八王子古宮・山中式期の不安定性である。その中で富の蓄積より人的資源を把握し、より強い意志

を持つ指導性と、地域に沈殿した記憶遺産を再活用・評価する傾向が生み出されていくと推論し、その延長上で八王子遺跡の長方形空間が登場していく可能性がある。

それは127年イベントとの難しい葛藤であり、人々はさらなる試練に巻き込まれていく。やがて個別分散的な対処方法から抜け出し、その地に残る歴史遺産を捨て去り、あらたな地平をめざして大きく動き出し始めたようにも見えてくる。最後にこの点をまとめておきたい。

## 12. まとめにかえて

東海系トレース第1波は廻間Ⅰ式4から廻間Ⅱ式1段階を中心とする土器・お墓・儀式等を含めた文化的拡散現象である。向かうベクトルは東の国々（赤塚2009）。ではその時期の濃尾平野の遺跡・集落はどうだろうか。八王子遺跡では、その時期の遺構は消え、ほとんど形跡もない。調査地点外にあると考えればそうかもしれないが、残念ながら再び現れた廻間Ⅱ式前半期の八王子集落からは一過性の極小規模なものであった。平たく言えばどこかに消えてしまったのだ。廻間遺跡において

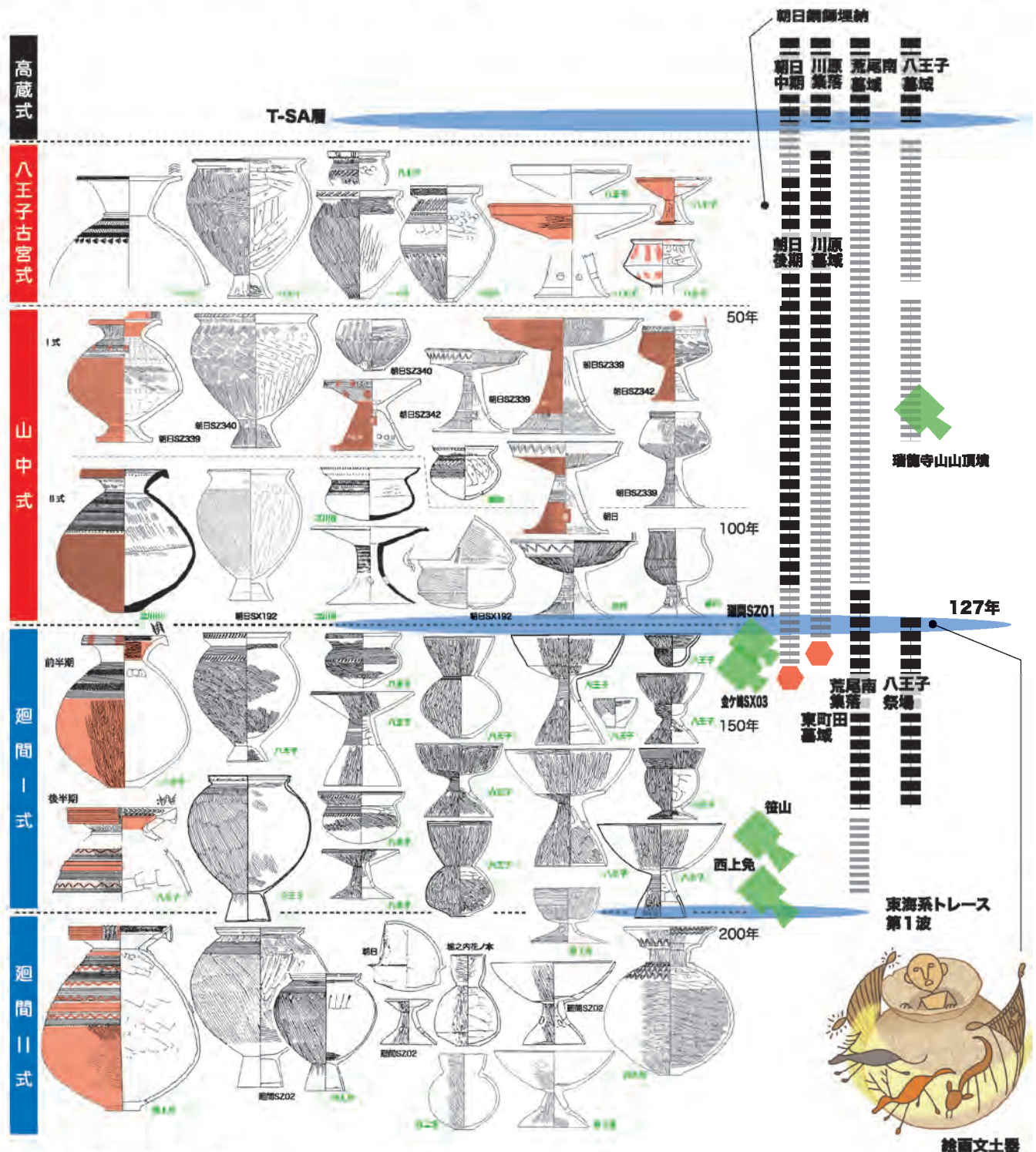


図4 土器編年と遺跡の消長

も、この時期急速な小集落化は明らかである。低地部の遺跡を概観しても廻間Ⅰ式期の遺跡は点在するが、Ⅱ・Ⅲ式期の活発な動きはなかなか見えてこない。多くは従来の場所から移動した。これが結論的な方向性であろう。では何処に向かったのか。そのヒントになりそうな遺跡を探してみると、いくつか見えてくる。一つは東美濃地域の遺跡群にたどり着く。

可児市河合遺跡群・宮之脇遺跡では廻間Ⅱ式後半期からⅢ式期にかけて集落ができ、さらに北陸・近江などの各地の土器が集まってくる状況が見えてくる(吉田1994)。近年調査された御嵩町顔戸南遺跡からも地域開発の動向が見えてきており(小野木2000)、この地域への廻間Ⅱ式期での開発投資は極めて興味深い。また同じ東美濃地域であるが加茂郡坂祝町東野遺跡では廻間Ⅰ式前半期で集落は途絶えるが、大型建物群が廻間Ⅲ式末から松河戸Ⅰ式期以降に展開していく様相が報告され、坂祝町前山古墳との関係が想定されている(河合2007・2016)。さらに西美濃地域では本巣市番場遺跡において

間Ⅱ式期を中心とした墳墓群造営が報告され、近接して同時期の崇慶大塚古墳の造営との関係が指摘されている(小野木2016)。このように尾張低地部ではほとんど明瞭な遺跡がみえてこないのに比べ、木曽川本流域あるいは以北ではいくつかの地点で集落開発が進められている事がわかる。どうやら濃尾平野では平野部での開発・復興を棚上げし、平野部北部域である美濃地域へ主要な人的移動が生み出されつつあったと想定したい。これを難民と呼ぶか移動と位置付けるかは別問題として再考したい。他の観点から見ると、それは低地部での水との長い戦いの歴史から勝ち取った治水対策技術や、地の神への畏敬の念とその対応法。そうした技術や記憶が北部域に蓄積されていたと推測したい。その一例を一宮市北道手遺跡で見ることができ。まさに廻間Ⅱ式期を中心に、水(河)との対話、具体的な祭祀場が集中して繰り返して作られていた(高橋1996)。因みに犬山扇状地においても同様に廻間Ⅱ式期以降の遺跡が希薄化する。

北近畿などからの文化路、中美濃から尾張東部地域へつながる文化

路、濃尾平野にはいくつかの文化路が新たに出現しはじめた点は注目したい。さらにはじめの王を継承する前方後方墳の造営が、北部域をエリアの中で本格化していく。廻間Ⅰ式末からⅡ式初頭に遡る可能性が高い大野町笹山古墳や一宮市西上免遺跡などの四〇から六〇メートル規模の前方後方墳の登場。これらから見えてくる風景は、二世紀まで何となく継続してきた、あるいは固執してきた弥生風景は、この時点において一気に崩壊、新たな領域と風景の創設に踏み出していったと思われる。八王子遺跡の特殊な長方形区画で執り行われたであろう、緊急する環境への対応とそれに立ち向かう人々の意思が受け継がれ、主に濃尾平野北部域への人や文化の移動と技術の蓄積が始まり、その結果新たな枠組みを創り出そうとする動きが整えられていく。次なる三世紀前半期の動きは濃尾平野北部域を中心としてまとめられていくものと思われる。

#### 【参考文献】

- 赤塚次郎編1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集  
赤塚次郎2002「主要遺構の変遷」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集  
赤塚次郎2009『幻の王国 狗奴国を旅する』風媒社  
赤塚次郎2022「濃尾平野の墳丘墓」『纏向学の最前線』纏向学研究第10号  
赤塚次郎2024「東海としての銅鐸記憶遺産」『遷渡』研究紀要第11号  
赤塚次郎2025「はじまりの美濃之國 邪馬台国時代の風景」『郷土研究 岐阜』第143号  
小野木学編2000『顔戸南遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第58集  
小野木学2015「B地区における建物跡等の概観」『荒尾南遺跡B地区Ⅱ』岐阜県文化財保護センター調査報告書第131集  
小野木学2016「番場遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書 第138集  
河合洋尚2007『東野遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第104集  
河合洋尚2016『東野遺跡Ⅱ』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第136集  
高田康成編2016『東町田遺跡Ⅲ』大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第26集  
高橋信明編1996『北道手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第67集  
中島和哉編2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書』養老町埋蔵文化財調査報告書第6集中塚武2021『酸素同位体比年輪年代法』同成社  
成瀬正勝編2000『砂行遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集  
服部信博編2001『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集  
樋上昇編2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集  
吉田英敏・吉田正人1994「宮之脇遺跡A地点」『川合遺跡群』可児市教育委員会

# 隠士「聖阿」によって造立された 入鹿切れ供養地蔵・供養塔（犬山市羽黒）について

NPO法人 古代遷渡の里・文化遺産ネットワーク

近藤 健一

## はじめに（調査の経緯）

「入鹿切れ」は今から157年前の慶応4年（明治元年・1868年）5月、梅雨の長雨によって増水していた入鹿池（犬山市）の堤防が決壊し、下流にあたる尾張北中部地域の村々が濁流に襲われ、およそ一千名が犠牲となった災害のことを指す。筆者は本紀要の前号において、数年



図1『募化簿』徳川林政史研究所所蔵（註2）  
（\*画像転載不可）

来の調査に基づきこの災害の文献目録を発表したが（註1）、この調査の折、徳川林政史研究所において『募化簿』という興味深い文書に出会った（図1・註2）。この文書には災害後、犠牲者の供養のため羽黒村（現・犬山市羽黒）に複数造立された地蔵に関わる願書の下書き、または控えと思われるものが7通ほどとじてある。現時点では専門家による評価がなされていないとみられるため、筆者の立場でこの文書について深く追究することはできないが、試みに読み解いたところ、おおむね以下のような内容の願書が2通含まれていることが分かった。

辰年（慶応4年）7月、羽黒村庄屋より代官方御役所へ

入鹿切れ犠牲者の供養のため「聖阿」を發起人として村内に地蔵尊を造立

することを許可願いたい

これら2通の文書は、それぞれ別の地蔵のことを述べているように見受けられた。確かに羽黒地区では、発起主として聖阿の名を刻む供養地蔵が興禅寺にあることが先行する研究で紹介され、筆者も現地を確認している。しかしもう1体あるというのは見聞きした記憶がなかった。あるいは地区内のどこかに存在するのではないかと。そう考え調査したところ、羽黒朝日の共同墓地で「聖阿」の2文字が刻まれた地蔵を発見した。本稿ではこの地蔵を紹介し、またすでに知られている聖阿造立の供養地蔵・供養塔についても改めて調査した成果を述べる。

## 1. 羽黒朝日の供養地蔵

○所在地…犬山市羽黒上前川原名鉄羽黒駅から東へ450m、五条川の北100mほどの地点に羽黒朝日地区の共同墓地がある（図2の1）。墓地中央の広場には「丹羽郡羽黒村朝日敬白」と刻まれた聖観音（享保3年）のほか、六地藏、棺台石などが並んでいるが、その一角に無縁仏の墓石に囲まれて北向きに立

つ背の高い地蔵がある（写真1）。地蔵は方形と蓮花形の台石を積んだ上に立つ舟形の地蔵菩薩立像であり、本体の高さ118cm（およそ4尺）、台石を含めた総高は151cmを測る。そして、以下の銘文が刻まれている。

本体正面



本体背面

南無阿弥陀佛 志主 聖阿

方形台石

正面

………  
………  
横死  
………  
亡（霊）  
………  
追  
………  
供養

左面（東面）

慶…  
四戊辰  
五月十  
四日晩  
爲洪  
水溺  
死



図2 犬山市羽黒地区中央部の地図（国土地理院電子国土Webに加筆）



写真1 羽黒朝日の供養地蔵 付・聖阿の銘

\*「…」は昔のため判読できず。  
\*（ ）は一部見える箇所からの推定。

これらの銘文について検討すると、台石左面の銘は「慶（応）4戊辰（年）5月14日の暁に洪水のため溺死」と読めることから、入鹿切れ犠牲者のことを指していると考ええる。また台石正面の銘は「横死した亡霊を供養

する」という意味の文だと推測される。これらの点から、この地蔵は入鹿切れ犠牲者の供養を目的として造立されたものと考ええる。

地蔵について地元の男性（50代くらい）に話を伺ったところ、「無縁仏を供養するためのお地蔵さん」であるとの説明があった。入鹿切れにより無縁仏となった人もいるため、同災害の供養の意味も含まれるかもしれないとも話されていた。また町内会長等を歴任された90代男性の話によると、この地蔵が入鹿切れに関わるものとは聞いたことがないとのことであった。

他方、文献上においては、この地蔵のことを述べていると解釈できる記述が複数みられる。まず長谷川玄通廣泰による手記『羽黒水災記』が挙げられる（註3）。これは入鹿切れの災害の状況やそれに対する救済・供養について記録したもので、成立は明治初期とみられている。この書には災害当時の浸水域を描いた地図が付属しているが、このうち五条川左岸の稲置街道沿いに「六字名号 地蔵尊」と記し、その説明として以下の記述がある（読点は筆者が付したものの、註4）。

地蔵菩薩、南無阿弥陀仏名号、二躰建立、朝日河原地蔵尊一躰、都合三躰、僧聖阿ト云モノ建立也、点眼ナシ

この一文からは、聖阿という僧が地蔵2体および名号碑1体、合わせて3体を造立したことが読み取れる。このうち「地蔵菩薩、南無阿弥陀仏名号」については現在興禅寺にある供養地蔵と供養塔（後述）を、「朝日河原地蔵尊」は地図中に示されていないが、朝日墓地の地蔵を指している可能性が考えられる。また、「水



写真2 羽黒朝日地区の入鹿切れ供養塔



写真3 興禅寺



写真4 興禅寺の供養地藏付・聖阿の銘

害見舞一覽」という文書がある(註5)。これは入鹿切れの被災者に給付・寄付された金品や、犠牲者のために行われた法要などを箇条書きにしたもので、それぞれに寄付者名も記されている。編者や成立年代は不明である(註6)。この中に以下の記述がある。

一大施餓鬼 当組溺死埋葬ノ墓ニテ  
犬山常満寺 // 専念寺 勢州ノ  
隠士 聖阿

(中略)

一石地藏壹体 東街道ノ西字神ノ

木二建ル追テ墓所ニ移ス 勢州ノ隠士 聖阿

文中の「石地藏」について、東街道は羽黒を通る2筋の街道のうち東すなわち上街道を指すと考えられ、同街道からほど近い墓地にあり、聖阿の名が刻まれた今回発見の地藏が当てはまる可能性がある。また時期や場所是不明だが、聖阿が犬山城下町の常満寺(浄土宗西山禅林寺派)や専念寺(浄土宗)とともに大施餓鬼をとり行ったことが分かる。

#### ■羽黒朝日地区と入鹿切れ

羽黒地区は入鹿池から出て西へ流

れる五条川の流域に位置しており、江戸時代の随筆の言葉を借りれば「東西へ長き大郷」であるため、いくつかの小地区に分かれている。朝日はその中でも東寄りに位置し、五条川右岸の東西400m・南北600mほどの範囲に集落が形成されている。入鹿切れに際して当地区は水高1丈(3m)ともいわれる濁流に襲われ、「朝日組損亡」によれば270余名が溺死、住家80棟が流失、朝日墓地の北にある観音寺も諸堂が流失するなど甚大な被害が生じた。溺死者の遺体は「番人屋敷」に埋葬されたという(註7)。

その朝日地区には現在、入鹿切れ供養塔といわれる石塔が2基存在し

ている。まず集落の北端に近い広場に立つ「入鹿洪水溺死群霊塔」は地区の内外でよく知られ、自然災害伝承碑として地図にも載っている(写真2右・図2の2)。銘によれば明治33年5月14日の造立であり、犠牲者の33回忌にあたる。伝承によると、洪水の後この広場へ溺死者の亡骸を集めて埋

葬したが、30年ほど経つと人骨が露出するなどしたため、それらを集めて埋納し、供養塔を建立したという(註8)。また、立圓寺(真宗大谷派)境内の墓地にある南無阿弥陀佛の名号碑には「水死者各霊 入鹿洪水明治元年辰五月」と刻まれ、入鹿切れの供養塔であることが分かる(写真2左・図2の3)。施主は河村儀兵衛、造立年代は不詳である。このほか興味深い年中行事として「施餓鬼」が挙げられる。これは7月下旬か8月上旬頃、羽黒地区内の興禅寺・立圓寺・観音寺の3宗派の住職を招き、朝日墓地にて無縁仏の供養を行うものであるという(註9)。興禅寺住職の話によれば、盆の行事

であり入鹿切れ供養の意味合いは特段ないことであるが、地区には同災害供養の行事だと認識されている方もいる。行事の元々の性格について現状でははっきりしないが、後考のため記しておく。

朝日墓地の地蔵については前掲の地元の方々の話に基づけば、造立の動機となった入鹿切れ供養の意図は現在伝承されていないようであるが、広く無縁の人々を弔うためのお地蔵さんとして崇敬されている。

## 2. 興禅寺の供養地蔵

○所在地・犬山市羽黒城屋敷

羽黒駅の北西400mほどの地点に妙国山興禅寺がある(写真3・図2の4)。承安4年(1174年)

創建と伝わる臨済宗妙心寺派の寺院で、梶原景時ゆかりの寺として知られる。同寺の境内、墓地の入口付近に石とコンクリートで築かれたピラミッド形の壇があり、各段に無縁仏の墓石が並んでいるが、その頂上には地蔵が北向きに立つ(写真4・図3)。前節の地蔵と同じく方形・蓮花形の台石を有する舟形の地蔵菩薩立像であり、本体の高さ約105cm(3尺5寸)、総高約145cmを測

る。銘文および書下し文(文責は筆者、以下同)は以下の通り。

本体正面

毎日晨朝入於諸定  
遊化六道拔苦與樂

本体背面

為接譽貞迎信女及  
願誓願本誓誓心  
念佛結緣衆等菩提  
發起主 聖阿造立

方形台石

正面

入鹿 水災 □死 亡靈 追善 供養

右面(西面)

應 五月 十四

\*「□」は破損のため判読できず。  
\*「:」は墓石が接しているため見えず。  
\*台石左面・背面(東・南)は墓石が接しているため銘の有無は不明。

○書下し

〔本体正面〕毎日の晨朝に、諸定に入り、六道を遊化して、苦を抜き樂を与へたまふ

〔本体背面〕接譽貞迎信女、および願誓願、本誓誓心、念佛結緣衆らの菩提のため

發起主 隱士 聖阿 造立す

この地蔵は旧制小牧中学校が昭和6年に刊行した『入鹿切聞書』において供養地蔵として紹介されており(註10)、それによると元々「羽黒前川原、齋木医師と大塚商店との間」にあつたというが、昭和初期の時点では興禅寺に移されていた。この旧位置は舟橋昭治の研究によれば現在地より600mほど南、五条川左岸の稲置街道沿いの地点にあたる(図2の5・註11)。また移設の時期は不明である。



図3 昭和初期の供養地蔵  
『続々尾北郷土資料写真集』  
昭和8年(「国会図書館デジタルコレクション」より)

## ■興禅寺周辺地区と入鹿切れ

興禅寺の過去帳によれば同寺は入鹿切れにより浸水被害を受け、その深さは門前で1丈(3m)、門庭4

さて、銘文について検討すると、本体正面の銘は『延命地藏菩薩經』の一節であり、地蔵菩薩の功德を説く。また背面の銘では3名の人物の戒名および念佛結緣衆という集団名を挙げ、彼らの菩提のためという造立目的の1つを述べている。戒名はいずれも2文字目に誓の字があるが、これは誓号といい、浄土宗にみられる戒名の形式である(註12)。これらの人物が入鹿切れ、また聖阿とどのような関わりがあるかは分かっていない。そして台石の銘文については、前節の地蔵のそれと内容がよく似ているように見受けられる。



写真5 入鹿切れ流石と北向き地藏尊

尺2寸、床上2尺2寸に達した。また檀徒318名が死亡し、寺が所有する田畑も全て流失したという（註13）。そして周辺地区における被害も大きく、「入鹿切二付溺死人ノ調」（小牧代官所による調書の写し、註8）によれば寺のある川原町組で69名、稲置街道を挟んだ東の堀田組で154名、五条川対岸の成海組で25名の犠牲者が出た。

当地区に現存する入鹿切れ関連の遺物としては、興禅寺の「北向き地藏尊」と「入鹿切れ流石」が著名である。北向き地藏尊（写真5右）は総高およそ3.5mに達する大型の立像であり、入鹿切れに関わる銘は

見出せないが、『羽黒水災記』に記された「地藏大菩薩」にあたるとみられている。これは明治2年4月に「川原町大道傍」、おそらく五条川右岸の稲置街道沿いに造立された高さ8尺5寸の供養地藏で、発起人は小牧宿の海老原友右衛門ら現在の小牧市方面の人々であった。また入鹿切れ流石（写真5左）は本堂前に立てられている高さ約2.5mの巨石で、災害当時、桜海道25番地（朝日集落の東、図2の6付近）に流れ着いた石を、のちに寺へ移したものである（註13）。これら大地蔵や巨石は災害による破壊、人々の受けた衝撃、また犠牲者に対する思いの大

きさを、視覚を通して伝える存在となっている。

3. 興禅寺の供養塔

前節の地藏が立つ墓石の山の西側、基壇上に石塔や石仏が6基並んでいる。これらも一見墓石のようであるが、檀徒250余名への授戒を記念した石塔（文化5年）や熱田継鹿尾千日参りの成就記念の地藏（享保4年）などが含まれ、記念碑の類と思われる。この一群の北端にあるのが入鹿切れ供養塔である（写真6）。正面に「南無阿弥陀佛」の六字名号を刻む角柱形の石塔で、本体の高さ101cmを測る。その銘文は

同下、寺田、萩島、余野、伝右衛門新田、宗雲新田、八左衛門新田、長桜、河内屋新田、曾野、神尾、永塚などの総計八百五十有余人、そのほか六畜虫魚らの追福のため、名号石および地藏尊、他力をもってこれを造立す

また城州淀河、泉州堺、遠州天竜川・掛須賀など処々の洪水に溺死の霊、および近歳東西に戦死の霊魂らの、苦を離れ衆を得て大菩提を証せんことを願ふ

発願主 吉水末流の隠士 聖阿

この石塔は『入鹿池史』（1994年）で興禅寺所在の供養塔として紹

| 左面                                                                                        | 正面        | 右面                                                                                                                              |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 畜虫魚等為追福名號石及地藏尊以他力造立之<br>又願城州淀河泉州堺遠州天龍川掛須賀等處々洪水溺死靈及近歳<br>東西戦死之靈魂等離苦得樂證大菩提<br>發願主 吉水末流隱士 聖阿 | 南無阿弥陀佛 源重 | 慶應四戊辰歲閏四月五月之交霖雨三旬入鹿池水大溢五月十四日曉堤<br>遂崩傍近村家罹災横死者即羽黒組朝日堀田川原町成海及五郎丸<br>河北小口中小口同下寺田萩嶋余野傳右衛門新田宗雲新田八左衛門<br>新田長櫻河内屋新田曾野神尾永塚等總計八百五十有余人其他六 |

図4 興禅寺供養塔銘文

図4の通りであり、以下に書下しを記す。

慶應四戊辰歲、閏四月・五月の交に霖雨三旬、入鹿の池水大いにあふれ、五月十四日曉、堤ついに崩れ、傍近の村家災ひにかかる、横死者、すなはち羽黒組は朝日、堀田、川原町、成海、および五郎丸、河北、小口、中小口、

介されているが、それ以前の来歴は不明である。ただし、先に述べたように『羽黒水災記』の地図上、五条川左岸の稲置街道沿いに「六字名号地藏尊」と記されている点、また前節の地藏がかつてその付近にあったとされる点を踏まえると、元々前節の地藏と並んで街道沿いに立つており、ともに興禅寺へ移された可能性が考えられる。

銘文について検討すると、前半の横死者が出たという村名は「入鹿切二付溺死人ノ調」記載の村名とおおむね一致する。また後半の洪水被災地とされる地名は、文献から得られた以下の情報を踏まえると、入鹿切れと同時期に被災した地域（またはその近く）のものではないかと思う。それを前提とすると「近歳東西戦死之靈魂」は幕末維新期の戦争等による死者を指していることになる。

○淀川：5月12日に山城国・淀で出水、淀町の家屋多数が大破し城内も浸水する（註14）。14日には摂津国の各所で決壊、右岸一帯が大洪水となる（註15）。

○和泉国・堺：5月13日、大和川が大和橋上流の右岸で決壊、堺の対岸の安立町（河内国）では民家30戸余りが流失し死者が出た（註15）。

○天竜川：5月19日に氾濫し流域諸村で大被害、河口近くの掛塚村（掛塚湊）では民家73軒流失、20名死亡という（註16）。

このほか聖阿の肩書に「吉水末流」とあるが、吉水（よしみず）は京都・東山付近の旧地名とされる（註12）。浄土宗の宗祖・法然がここに草庵を結んだことにちなみ、同宗の信徒が自らを「吉水末流」「吉水の流れの者」などと称することがあるようだ。

#### 4. 聖阿・造立年代について

ここまで聖阿の造立した3体の供養地藏・供養塔を見てきたが、それでは聖阿とはいかなる人物なのだろうか。結論から述べると、浄土宗の僧侶であると考えられる。根拠としては以下の4点が挙げられる。

○常満寺・専念寺という浄土系寺院とともに大施餓鬼をとり行っていること（水害見舞一覧）

○浄土宗の戒名の人物について特に名を挙げて菩提を弔っていること（興禅寺供養地藏）

○「吉水末流」を名乗っていること（興禅寺供養塔）

○聖阿の名は、浄土宗および時宗の僧侶の名に用いられる「阿号」とみられること（註12）

これに関連して、供養塔には名号の揮毫者として「源重」の名が刻まれているが（図4）、名号の揮毫は僧が担うことが多いため、この人物も浄土宗の僧侶であることが想定できる。この聖阿と源重について、詳しい所属や身分を明らかにするため各所への問い合わせおよび文献調査を行ったが、『募化簿』については後述、註17）、解明には至らなかった。これは今後の課題である。

また3体の造立年代については、いずれにも造立年を示す銘は見当たらず、また銘文や文献において年代を判断する決め手となるものは見出せない。これ

についても今後史料等の発掘・研究が進んで明らかになることを期待するが、筆者として現時点では、3体とも発災から間もない明治元年もしくは2年に造立されたものと想定しておきたい。

これ以下の一節については未評価の資料に関わる内容のため参考の扱いとなるが、『募化簿』所収の辰年（慶応4年）の願書には聖阿について以下の肩書が記されている。

名古屋南寺町 光明寺隠居

この「光明寺」は現在名古屋市中村区道下町にある浄土宗・終南山悟真院光明寺を指すとみられる（写真



写真6 興禅寺の供養塔  
付・源重と聖阿の銘



写真7 光明寺（名古屋市中村区）

7)。慶応4年当時は南寺町、現在の中区白川公園付近にあった寺院であるが、昭和20年空襲により諸堂が焼失し、同年現在地へ移転したという。前掲の肩書から聖阿はあるいは光明寺の元住職ではないかと考え、同寺に問い合わせた。現住職の回答および提供いただいた資料によれば、慶応4年時点での住職は24世の智誉鏡学（在職慶応2～明治23年）であるが、それ以前の住職はみな亡くなっており、当時存命の元住職はいない、また聖阿という名でもないとのことであった（註18）。ただし同寺が所蔵する嘉永6（慶応2年）の過去帳の末尾に覚書があり（註19）、

その中に以下の僧名が記されているという。

教蓮社隨譽聖阿哲應俊順（註20）

現住職によると記載内容は1名の僧名のみで、住職歴や没年などの情報も一切なく、覚書に記した意図も不明という。ただし通常寺と関わりのない僧の名は過去帳に記載しないこと、また21世住職の教譽学応（聖蓮社教譽上人順阿隨心學應大和尚、在職文政6（天保6年）と共通する文字が名前に多く含まれているため、同和尚の弟子と推測されることなどから、光明寺と関わりの深い僧だと考えられるとのことである。この僧に関する詳しい情報は、震災により寺誌や正式な過去帳が失われていることもあつて見つからなかったという。また筆者も同寺を菩提寺とした商家の文書を一部調査したが（註21）、聖阿に関する情報は得られなかった。羽黒に供養地蔵や供養塔を造立した聖阿と、光明寺、およびその記録に見える聖阿との間に間があるかどうかについては情報が乏しいため判断できないが、今後の研究に資するため、調査によって得ら

れた知見を記載した次第である。

### おわりに

以上、聖阿という1人の僧が造立した供養地蔵と供養塔を見て来たが、彼の人物像、造立の詳しい動機や経緯、また石造物3体に掛かる費用をどのように工面したのかなど不明な点は多い。これに関しても造立年代などと同様、今後の研究により解明されることを期待したい。

また私事を述べると、筆者は入鹿切れにおける先祖の被災体験を折に触れて家族から聞かされて来たが、この災害についてはそこまで実感の伴わない歴史上の事件という印象が強い。しかし今回、これまで人々に認識されてこなかった供養地蔵を見出したことで、昔話や文献の上の存在ではない、現在と地続きの出来事だという感覚が深まったように思う。現在の入鹿池は大地震に対する耐震性など安全性が確認されているが、洪水に限らず大災害が起こり得るという実感を持ち、今後に備えるためには、やはり過去の災害を伝える遺物、またそれを遺した先人の思いに触れることは重要ではないかと、自らの感覚の変化を通じて考え

た次第である。

今回調査した石造物は多分に漏れず風化が進んでいることが見て取れ、こうした資料の調査が急がれることを感じた。今後も可能な範囲で調べを進めたいと思う。

最後に、調査や本稿の執筆にあたり以下の方々にご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

（敬称略、五十音順）

朝日地区の皆さん・興禪寺  
光明寺・浄土宗・常満寺・専念寺  
津守道夫・徳川林政史研究所  
丹羽毅・立圓寺

### 【註】

- （1）近藤健一「2024「入鹿切れ文獻目録」『研究紀要 瀬波 第11号』古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
- （2）史料番号：丹羽郡51。史料群「尾張国丹羽郡羽黒村 吉野太一郎家文書」に含まれる。堅帳、紙数10枚。表紙に「丹羽郡羽黒村 吉野鉦次郎 蔵」と記す。
- （3）長谷川広泰『羽黒水災記』愛知県公文書館所蔵
- \*『愛知県史』（1940年刊）の編集係が作成した写本。内扉に「吉野鉦次郎所蔵本写」と記す。
- 著者について、小牧代官所管内の医師名一覧（安政3年）に「羽黒村 長谷川玄通」の名が見えることから、羽黒に住む医者であった可能性がある（参考文献3の文書61―2号）。
- （4）参考文献5所収の『羽黒水災記』写本にも同様の記載あり。

(5) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会 1989『犬山市史 史料編六 近代・現代』犬山市

(6) 文中で会津戦争について「今年」と記しているため入鹿切れ当年の記録とも思えるが、供養地蔵の移設など明らかに後年の出来事の記述もあるため、追記がなされているとみられる。

(7) 註5の文献。溺死者の内訳は村民257名、役人の家族など5名、農休みによる来訪者約10名。

(8) 入鹿池史編纂委員会 1994『入鹿池史』入鹿用水土地改良区

(9) 観音寺は真言宗智山派。

(10) 市橋鐸磨 1931『入鹿切聞書』愛知県小牧中学校校友会

(11) 舟橋昭治 2013『入鹿池の築造と「入鹿切れ供養地蔵」について』編者に同じ

(12) 浄土宗大辞典編纂実行委員会 2016『新纂浄土宗大辞典』浄土宗

(13) 横山住雄 2007『尾張興禪寺史』妙国山興禪寺

(14) 京都市 1974『京都の歴史7 維新の激動』学芸書林

(15) 新修大阪府市史編纂委員会 1991『新修大阪府市史 第5巻』大阪市

(16) 静岡県 1996『静岡県史 別編2 自然災害誌』編者に同じ

(17) 揮毫者の源重について、常満寺もしくは専念寺の住職である可能性を考えて両寺に問い合わせ、また高僧ではないかと考え浄土宗（統括団体）に尋ねたが、いずれについても「該当する人物は見つからない」との回答があった。

(18) 光明寺提供資料によれば、江戸時代末期における同寺の住職は以下の通りである。また、ほかに多くの弟子が在籍していたそうである。

世代・住職名…在職期間／没年

21世・教普学心…文政6／天保6／弘化4

22世・明普学誠…天保6／嘉永5／嘉永5

准世代・念普学栄…嘉永5／同7／文久元

23世・俊普単静…嘉永7／慶応2／慶応2

(19) 書名を『新葬録』といい、正式な過去帳に記載する前に用いる仮の過去帳であるという。

(20) 僧名は教蓮社（蓮社号）、隨譽（譽号）、聖阿（阿号）、哲應（道号）、俊順（あざな）に分節される。

(21) 名古屋博物館所蔵「伊藤次郎左衛門家資料」。同市市政資料館にて複製本の閲覧が可能。

#### 【参考文献】

(1) 市橋鐸磨 1933『続々 尾北郷土資料写真集』愛知県小牧中学校郷土室

(2) 吉野家先祖五百年諱発起人会 1969『小弓庄吉野家拾遺』編者に同じ

(3) 愛知文教大学地域連携センター小牧市古文書調査会 2011『兼松家（岩崎村庄屋）文書目録・図録・全釈文』小牧市教育委員会

(4) 北原糸子・松浦律子・木村玲欧 2012『日本歴史災害事典』吉川弘文館

(5) 大口町歴史民俗資料館 2018『秋の企画展 地域の災害を知る 入鹿切れ シンポジウム 入鹿切れを考える』洪水堆積層の調査から』編者に同じ

(6) 大塚友恵 2019『「入鹿切れ」過去の災害から学ぶ』『かじわら 第31号』梶原景時公顕彰会

# 赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見

― 犬山市八曾地区を事例に ―

愛知学院大学 文学部 歴史学科 四年

兼松 泰弘

## I. はじめに

本稿は、2024年12月から2025年3月にかけて行われた愛知県犬山市八曾地区を中心とした山茶碗窯跡の踏査報告である。今回の踏査により、これまで埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかった新たな窯跡の存在が数多く確認されただけでなく、考古学の分野における赤色立体地図の活用例として、貴重な一例になるのではないかと感じている。

事の発端は、2024年9月27日に愛知県統合型地理情報システム（マップあいち）上で、赤色立体地図が公開されたことに始まる。赤色立体地図は、航空レーザ計測を行い得られた数値標高データ（DEM）から、傾斜量を赤色の彩度で表現した立体地図である。

私がそのことを知ったのは公開さ

れてから1か月ほど経過した11月上旬だったのであるが、その後赤色立体地図で八曾地区を眺めていたところ、やけに規則的で不自然な凹みと平場のようなものを八曾山周辺の丘陵に大量に発見した。それが窯跡ではないかと思い、さらに1か月後に現地へ赴いたところ、窯体のような凹みと前庭部と思われる平場、その下に山茶碗片が散布する灰原部分を確認した。

そのような経緯があったため、まず八曾地区にどれだけ窯跡が存在するかを把握するために踏査を開始した。

本稿では、踏査した窯跡についての概要を報告し、赤色立体地図の活用による窯跡の調査と今後の展望について考察したい。

## II. 八曾地区の地勢と周辺の窯業遺跡

### ● 地勢

八曾地区は、犬山市の最東端に位置する地区であり、北と東はそれぞれ岐阜県可児市・多治見市に、南は小牧市・春日井市に隣接している。犬山市は東部と西部で地勢が大きく異なり、八曾地区を含む東部には、東部丘陵（愛岐丘陵・尾張丘陵とも）と呼ばれる標高200m前後の丘陵地が広がり、そのほとんどが山林になつている。それに対して西部は、濃尾平野の北東端に位置し工場や住宅街、田畑が広がっている。

本稿でこれから取り上げる窯跡が位置する周辺には、標高327mの八曾山（黒平山とも）と、犬山市の代表的な湧水湿地である八曾湿地が存在する。特に、八曾湿地周辺は林野庁の管轄する八曾自然休養林内「犬山ふれあいの森」として保全活動が行われており、八曾自然休養林を含む八曾地区のほぼ全区域が国有林とされている。そのため、今回踏査した窯跡についてもその範囲内に含まれる。また、植生はアカマツやスギ・ヒノキで構成される針葉樹林を中心とし、ほかに広葉樹林が広が

る一帯と、部分的に林床がウラジロによつて覆い尽くされている場所がある。地質は、粘土層を含む瀬戸層群が岐阜県側から伸びており、この良質な粘土に犬山市の窯業生産は支えられていたものと思われる。加えて、この層は表面に砂礫層が発達しているため、歩いていると数cm大の砂礫が多く転がっているのが目につく。

### ● 周辺の窯業遺跡

丘陵地が広がる犬山市東部では、小牧市篠岡地区を中心とする「尾北古窯跡群（以下、尾北窯）」の一端として、古代より連綿と窯業生産が行われていた。基数は20基ほどで、それらの多くは平安時代のやきものである「灰釉陶器」を生産した窯跡であり、入鹿池以西を中心に南北に分布している（図1）。また、数基ではあるが瓦専焼窯も確認されている。

その後、古代末期から中世にかけて、灰釉陶器から「山茶碗」と呼ばれる東海地方を中心に流通した無釉のやきものへと生産が転換していくが、尾北窯での山茶碗生産は12世紀前半を最後に終了し、その後衰退する。その一方で、北と東に目を向け

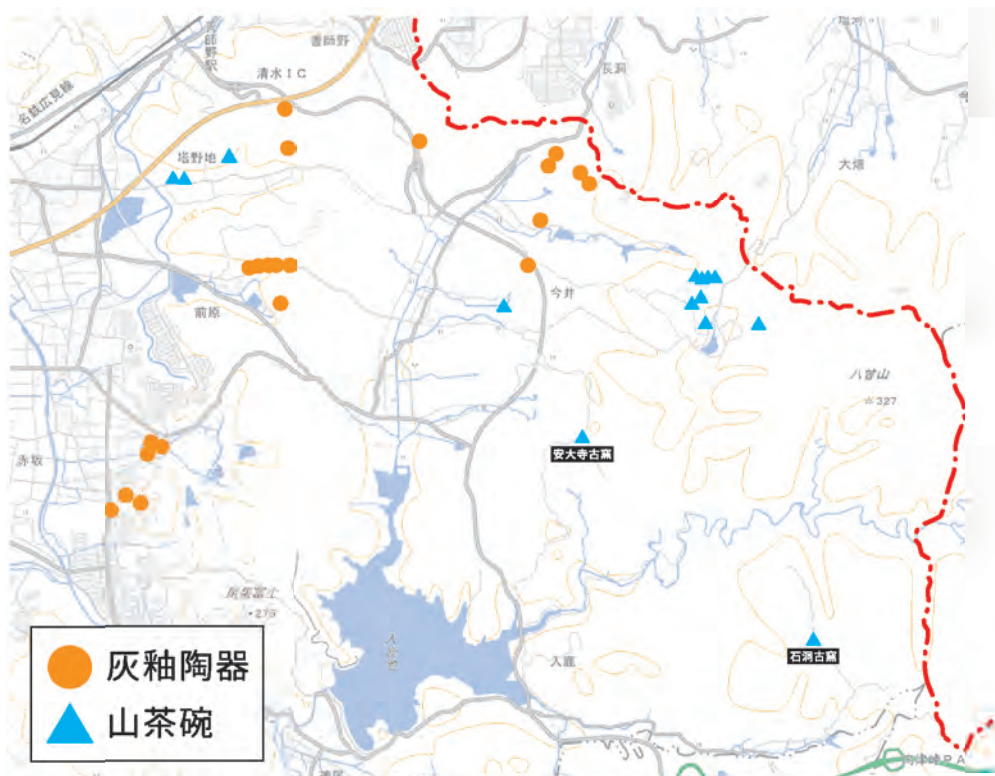


図1 犬山市の灰釉陶器・山茶碗窯跡分布図（県境は赤色一本鎖線）  
（地理院地図電子国土Webに加筆。位置は「マップあいち」を参照）

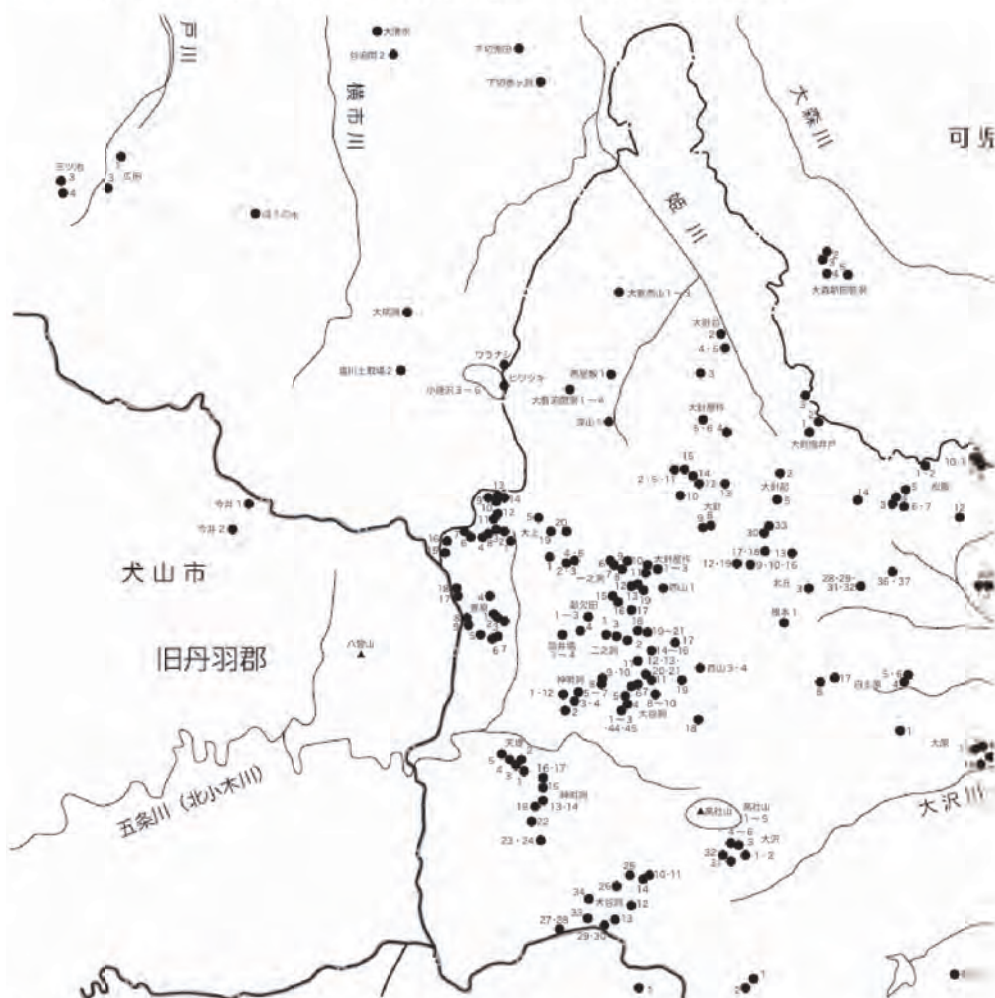


図2 犬山市隣接地域の中世東濃窯分布図  
（山本 2020より引用）

てみると、隣接する岐阜県の可児市や多治見市などは山茶碗生産の一大窯業地として多数の窯跡が確認されており、これらの地域は「中世東濃窯（以下、東濃窯）」の一端を担っ

ている。東濃窯は、「東濃型山茶碗」と呼ばれる薄手で緻密な胎土が特徴的な山茶碗を主体に生産していた窯跡群で、岐阜県の可児市・多治見市・土岐市を中心に、愛知県の瀬戸市北

部・犬山市・春日井市の一部にまで分布している。さて、それを基に犬山市における中世の窯業遺跡（山茶碗窯跡）の分布を見てみると、八曽地区を含む岐

阜県との県境に近い場所を中心に分布していることがわかり、古代に灰釉陶器生産を行っていた入鹿池以西よりも、入鹿池以東にその分布の中心が確認できる（図1）。このよう



写真1 八曾山中に置かれた道標の石碑  
(右 うつみち 左 たじみち 今井村)

犬山市の窯業遺跡の分布は古代と中世でやや異なることが確認できる。そして、八曾地区ですでに埋蔵文化財包蔵地として登録されている山茶碗窯跡は2つあり、1つは安大寺古窯（遺跡番号050133）、もう1つは石洞古窯（遺跡番号050140）である。

しかし、八曾地区では先に述べた安大寺古窯・石洞古窯以外にも、まだ未発見の山茶碗窯跡が存在するだろうと以前から考えられていた。その理由として、1つは八曾地区の山

道を歩いていると、所々で山茶碗の散布が見られることがあるという点である。これはおそらく、窯跡があった部分を削って道を造成したか、あるいはその山道を造る際に利用した土の中に、たまたま山茶碗が混入していたのではないかと思われるが、そもそもこれらの山道がいつの時代に作られたのかまではよくわからなかった。ただ、山中に残されている一つの手がかりとして、踏査中に発見した「右 うつみち 左 たじみち 今井村」と彫られた道標の

石碑がある（写真1）。詳しい年代まではわからなかったが、今井村が合併により廃村になったのは明治39年10月のことであるため、少なくともそれ以前にこの石碑が置かれたものだと考えたい。とすれば、明治期には既に八曾を通り、多治見や内津（春日井市）方面へと抜けるこの山道がよく利用されていたのではないだろうか。

また、もう1つの理由として、犬山市と多治見市の市境は尾根の頂上を境界線として区切られているのであるが、その尾根の多治見市側の斜面（東側斜面）では複数の山茶碗窯跡が確認されているにもかかわらず、犬山市側の斜面（西側斜面）では窯跡が1基も確認されていないというのがこれまでの分布の状況であって（図2）、現在の行政区域に沿うようにして窯跡が一切見られなくなるという実情に疑問を感じていた。このような山中での山茶碗の散布や窯跡の分布を見るからに、犬山市側にも窯跡がある可能性が高いだろうと考えられてはいたものの、なかなか踏査が進んでいなかったというのがこれまでの現状である。

### III. 踏査の概要

#### ●踏査の手順

はじめに、今回行った踏査の手順について説明する。

①GPSと赤色立体地図を照らし合わせながら、窯跡らしきものがある場所に向かう

②窯体らしき凹みと前庭部と思われる平場が確認できた場合は、その場所を窯跡として座標を記録する。基本的に窯体の凹み1つ（1基）を1地点として記録し、座標は前庭部の平場（もしくは窯体のすぐ下）で計測する。

③平場、あるいは灰原部分において遺物を採集する。遺物が採集できなかった地点もある。

これらを表にして整理したものを最後のページに掲載した（表1）。

#### ●踏査成果

今回の踏査で発見した窯跡は、合計で84地点である。すべての地点が埋蔵文化財包蔵地として登録されていないこれまで未発見であった窯跡であり、遺物が確認できなかった地点も一部存在するため断定することはできないが、ほぼすべて中世の山茶碗窯跡と考えてよいだろう。この

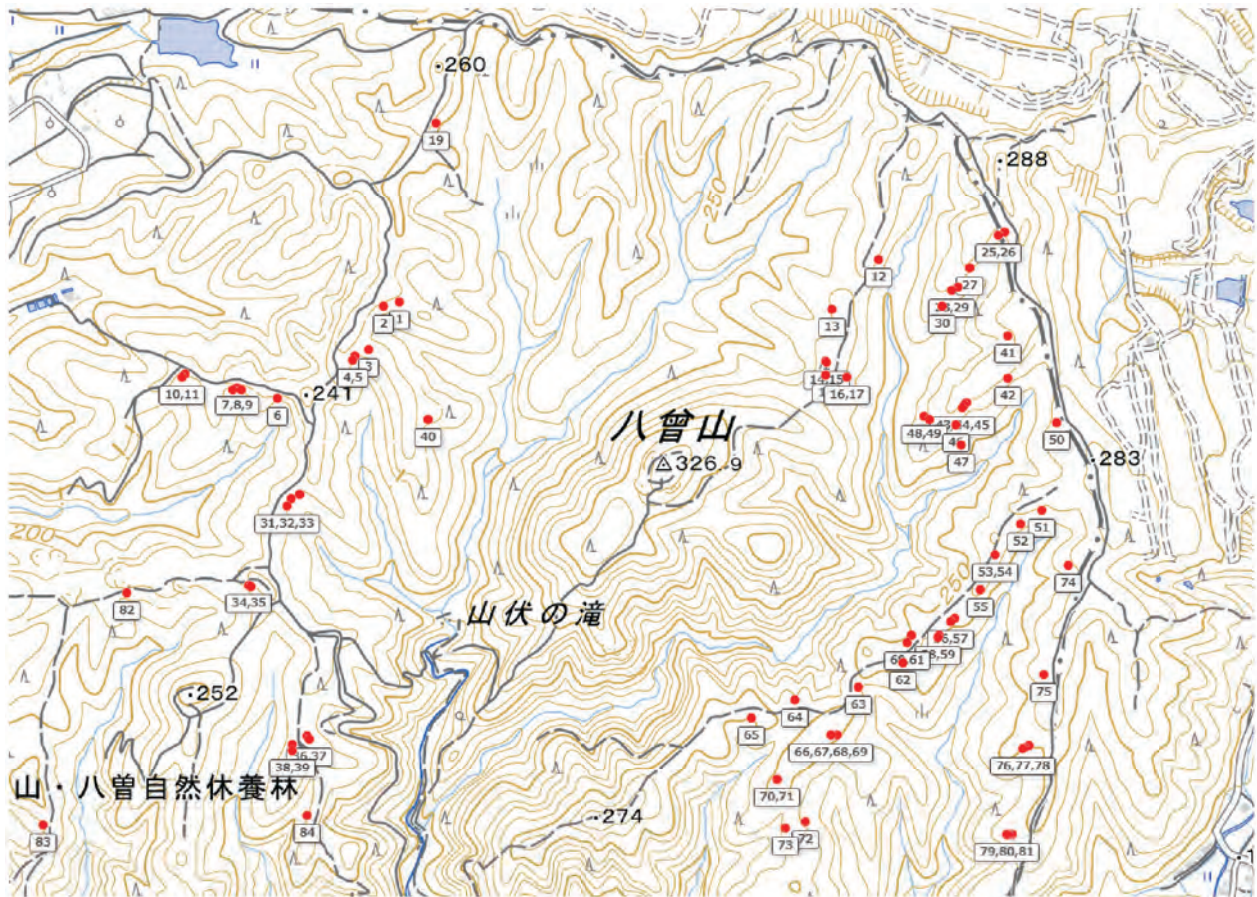


図3 踏査地点分布図（地理院地図電子国土Webに加筆）



写真2 現地の状況（窯体部分、右から地点58,59）

中で、本稿では八曾地区で踏査した79基について取り上げる（地点1、19・25、84が八曾地区）。

（1）窯跡の分布と構造

これらの窯跡は、八曾地区の中でも八曾山の東麓と西麓に集中し



写真3 現地の状況（窯体部分、右から地点79,80,81）

て分布しており（図3）、東麓は標高230～280mほど、西麓は200～250mほどの尾根が、八曾山の周囲を取り囲むようにつながっている。その尾根上に窯跡が築かれており、東麓では54基、西麓で



写真4 遺物露出状況（地点13）



写真6 遺物散布状況（地点38,39）



写真5 遺物散布状況（地点25,26）

竈体は、1基の場合と、2もしくは3基が横に並んで築かれる場合とがあるが、完全に真横に並んでいる地点もあれば、やや方向や角度が異なっていたり、標高差がある地点もある。平場は、1つの竈体につき基本1つ確認でき、竈体のすぐ真下に築かれる地点が比較的多い。ただ、中には竈体の両側も

は25基と、岐阜県多治見市側に近い尾根でより多く発見している。竈跡を築く位置としては、多くの竈が尾根の頂上付近に築かれるというのが特徴で、主となる尾根から伸びる枝尾根と枝尾根の間や、尾根がやや屈曲し、窄まった部分などに竈が築かれる傾向にある。先に述べた道標の石碑と関連して、当時は尾根道を利用した流通の経路が存在した可能性が考えられる。

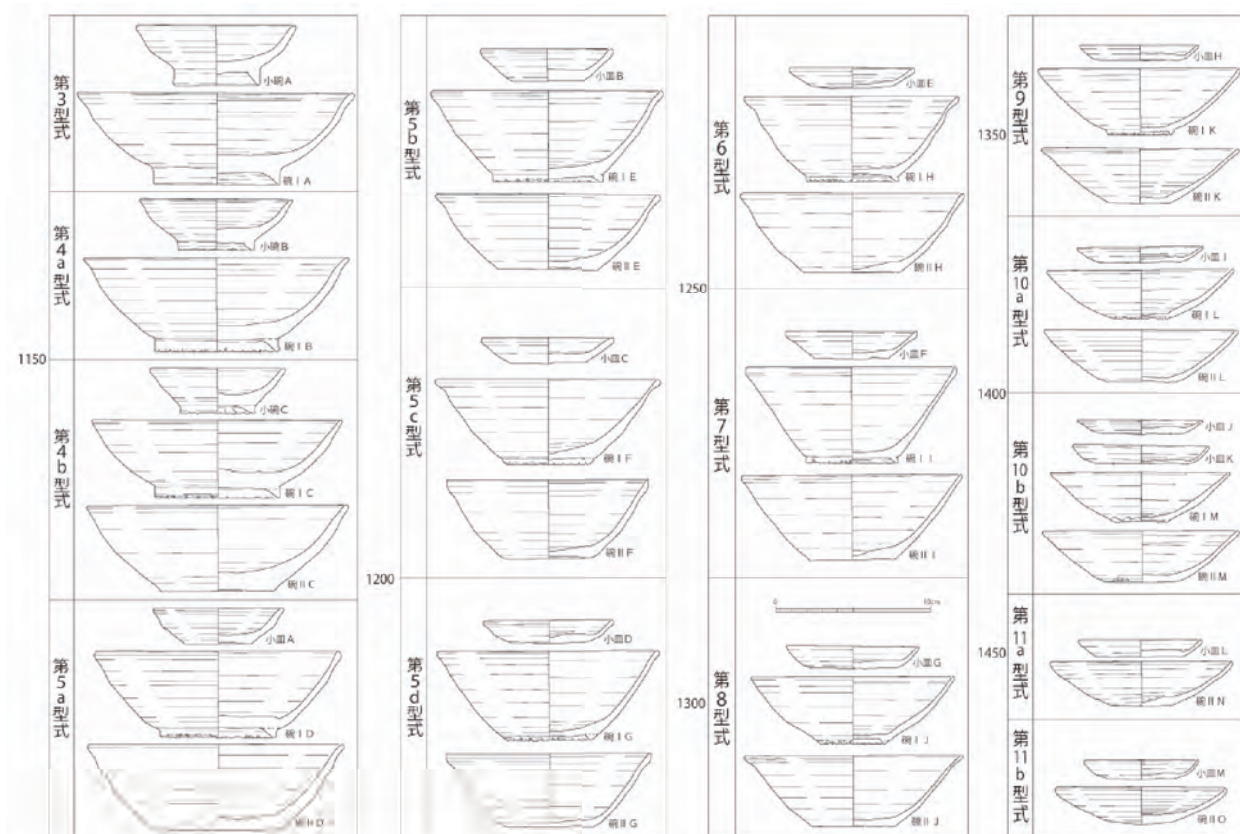


図4 東濃型山茶碗編年表（山本 2020より引用）

しくは一方のすぐ横にやや細長い平場を設けている地点や、全く同じ平場に対して2基もしくは3基の窯体を築く地点も一部確認できた。灰原での遺物の散布状況を見ると、まず堆積の違いで遺物が表面に露出している地点と、ほとんどしていない地点があり、その影響で各地点で遺物の量にバラつきが見られる。また、地点によっては平場のやや右側もしくは左側に偏って遺物が散布している様子が見受けられたり、平場から下の傾斜が急で、多くの遺物が谷の方まで転がっている場合もあった。

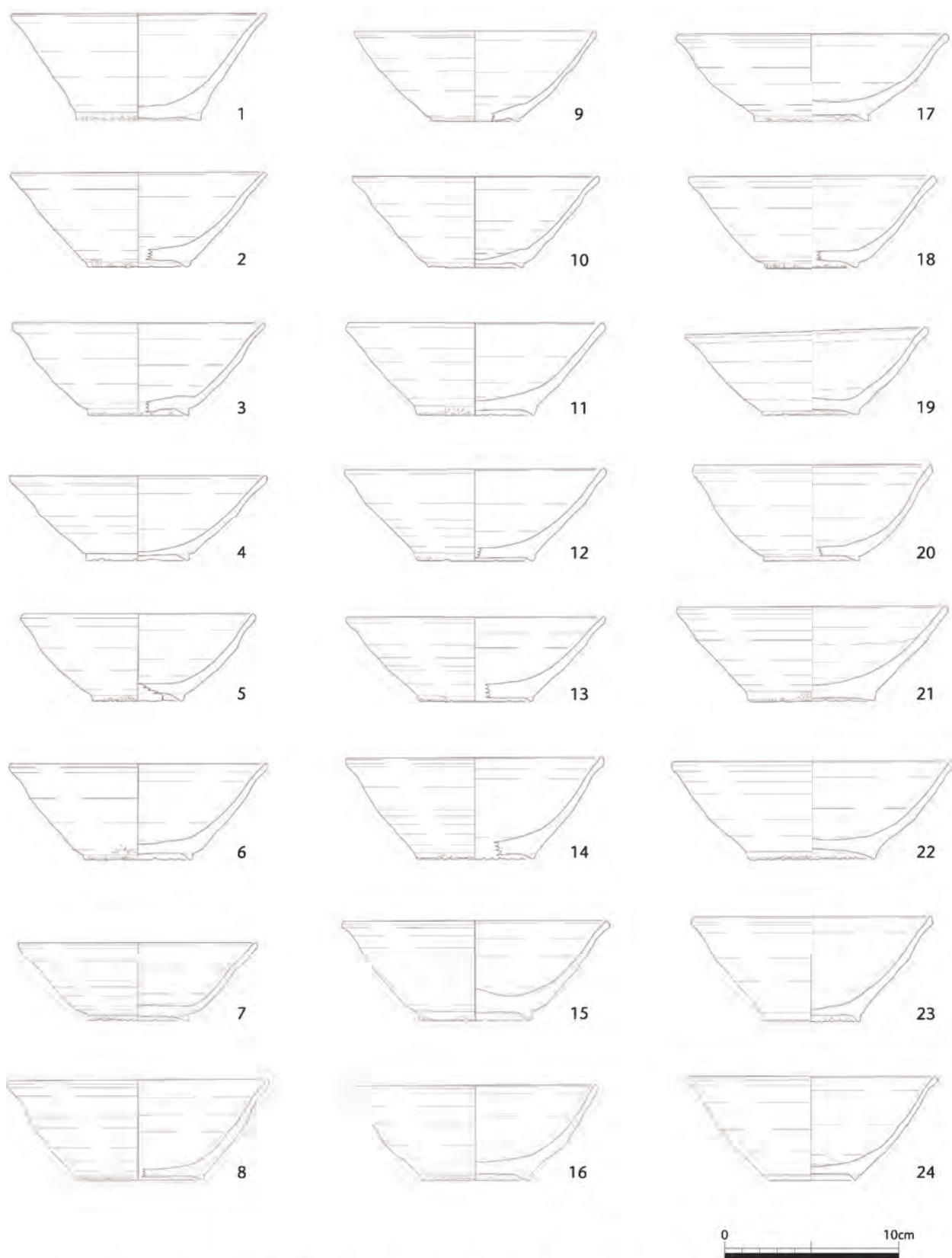
(2) 採集遺物

採集遺物は、すべて「東濃型山茶碗」と呼ばれるものであり、器種構成はその大多数を碗・小皿が占めている。碗では、一般的な有高台碗のほかは無高台碗、片口がついた片口碗、底部に穴が空けられた穿孔碗、内面に大量の刻線が刻まれた刻線文碗を採集している。ほかに、細片ではあるが瓶類の一部と思われるものと、器種が不明のものが数点ある。窯道具としては焼台と蓋を採集しており、焼台は赤褐色を呈するものが多い。蓋は、元々製品として作られ

たものを転用した転用蓋と、元から蓋として作られたであろう専用蓋を採集している。製品の外面全体に自然釉がかかっているものを転用蓋として区別しており、有高台碗と無高台碗、小皿で確認している。それ以外に、窯壁の一部、重ね焼きの融着資料がある。採集した量は合計でデンプコ約7箱分である。

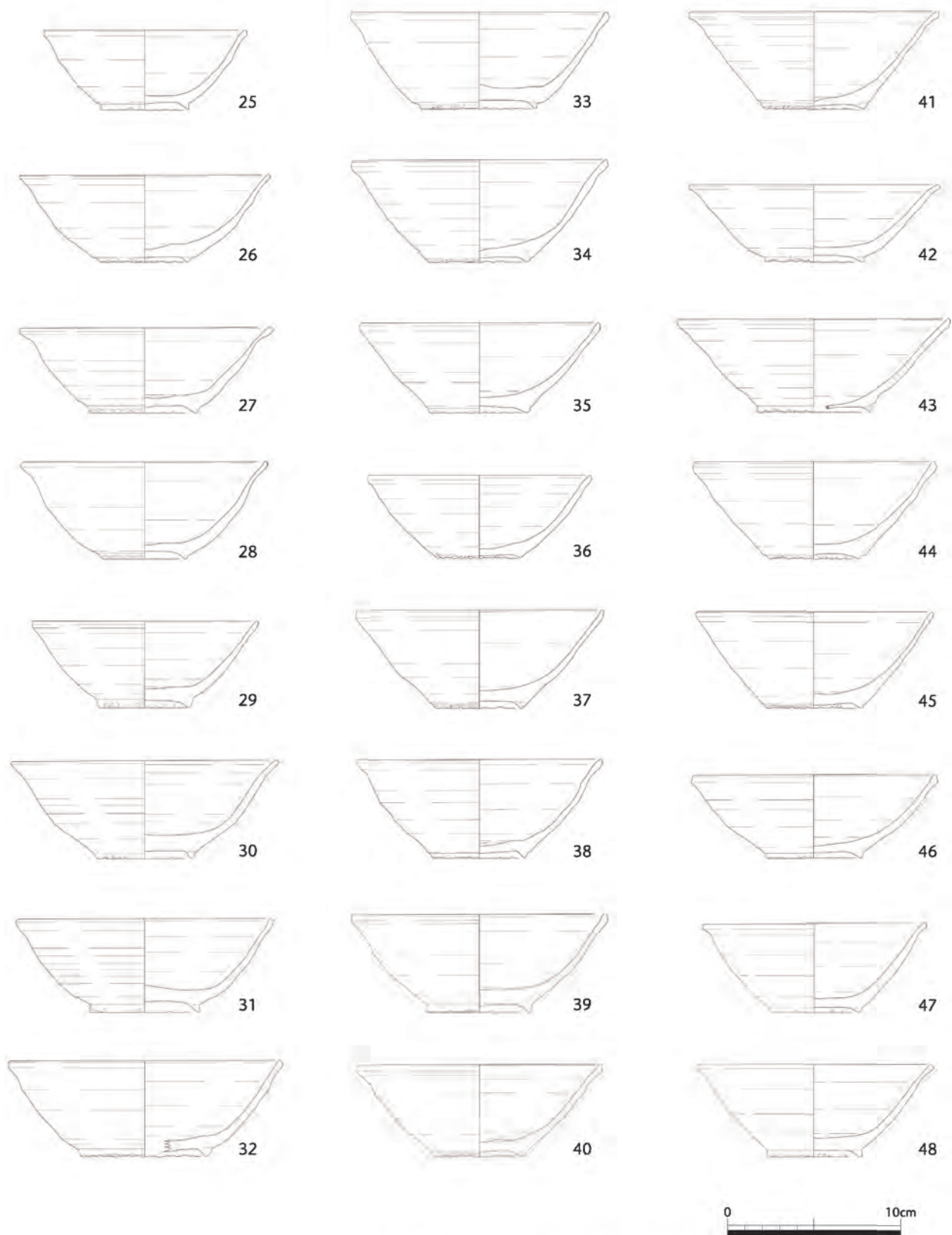
本来であれば、遺物が採集できた地点それぞれの遺物の実測図を掲載するべきであるが、時間の都合上、それらの中から残存が比較的良好だったものを抜粋し、可能な限り図化したものを掲載した。実測図番号「1」～「51」が碗、「50」は無高台碗、「51」は片口碗)で、「52」～「88」が小皿である。これらの遺物を2020年に山本智子氏が掲示した東濃型山茶碗の編年に照らし合わせると(図4)、おおむね第5a型式期(第7型式期(12世紀後半)～13世紀中葉)に相当するものであると考えられる。

なお、遺物の実測には伊藤佑真・小出一磨・城所李衣・寺井崇浩・永井碧・水野領介(五十音順、敬称略)の協力を得た。



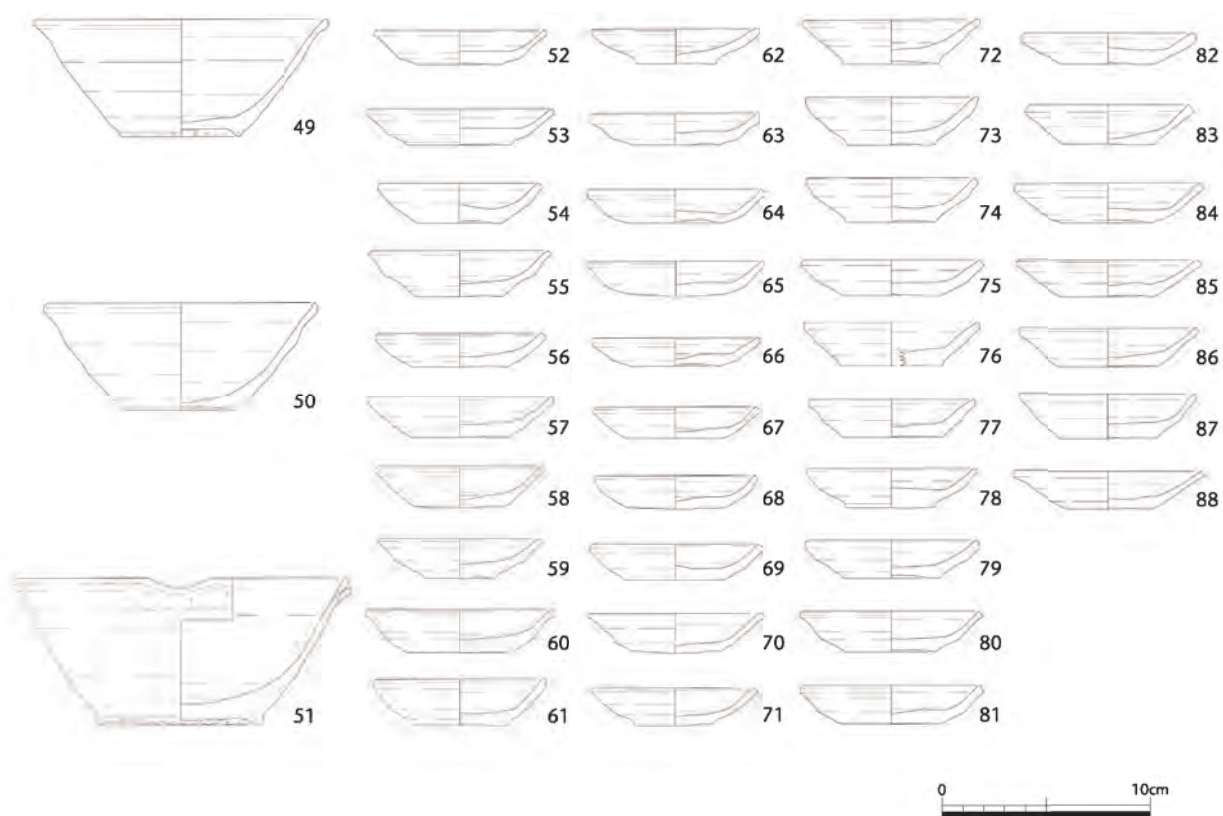
[1,2]- 地点 2 [3]- 地点 3 [4]- 地点 4or5 [5,6]- 地点 5 [7,8]- 地点 8 [9,10]- 地点 12 [11~14]- 地点 13  
 [15,16]- 地点 14or15 [17]- 地点 15 [18]- 地点 16 [19,20]- 地点 18 [21,22]- 地点 25or26 [23,24]- 地点 27

図5 八曾地区採集の山茶碗 実測図



[25,26]- 地点 30 [27~29]- 地点 31or32or33 [30,31]- 地点 31 [32,33]- 地点 36 [34~37]- 地点 39  
 [38,39]- 地点 41 [40,41]- 地点 45 [42,43]- 地点 51 [44,45]- 地点 53or54 [46~48]- 地点 58or59

図6 八幡地区採集の山茶碗 実測図



[49]- 地点 58or59 [50]- 地点 27 [51]- 地点 25or26 [52,53]- 地点 5 [54]- 地点 14 [55]- 地点 15 [56~59]- 地点 25or26  
 [60~62]- 地点 26 [63~68]- 地点 27 [69]- 地点 30 [70~72]- 地点 31or32or33 [73]- 地点 31 [74]- 地点 36 [75~79]- 地点 38  
 [80,81]- 地点 39 [82]- 地点 55 [83]- 地点 56or57 [84~88]- 地点 58or59

図7 八曾地区採集の山茶碗・小皿 実測図



写真7 八曾地区採集遺物（写真7～9は中野耕司氏撮影）



写真9 碗と小皿の重ね焼き



写真8 焼台



写真11 テンパコ内保管状況



写真10 採集遺物総量

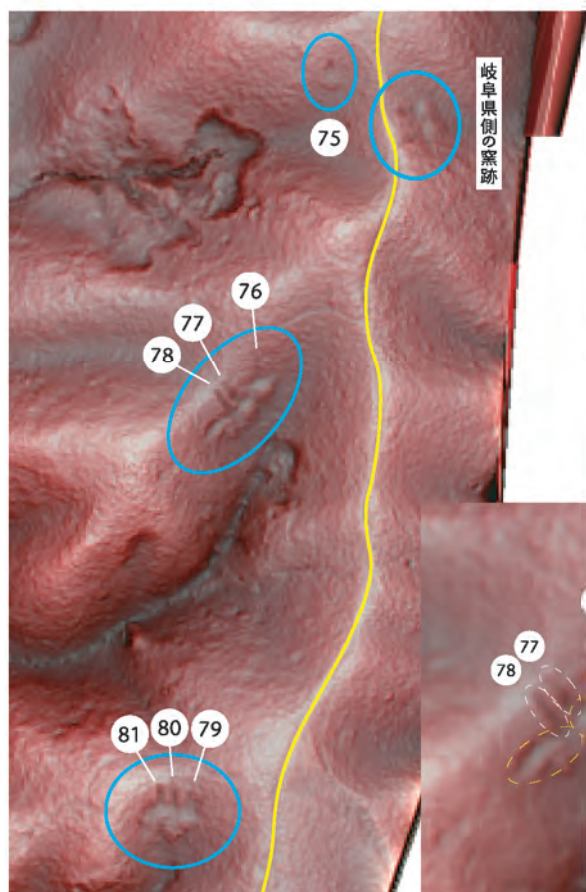


図8・9 岐阜県境の踏査地点（マップあいちに加筆）

#### IV. 窯跡の調査における赤色立体地図の活用について

さて、今回の踏査で非常に重要な役割を果たした赤色立体地図であるが、実際に地図上で窯跡がどのように見えるのかを確認してみよう。ちなみに、考古学の分野においては主に古墳や城館跡の調査において、赤色立体地図の活用事例が多数報告されている。

例えば、図8は岐阜県境（多治見市境）に位置する踏査地点である。県境をまたがって両側の尾根に窯跡が確認でき（岐阜県側の窯跡は名称わからず）、県境になっている尾根

から分岐する枝尾根に、それぞれ地点「75」、「76・77・78」、「79・80・81」が位置している。中でも地点「76・77・78」を拡大して見てみると、図9のように窯体と平場が確認できる。「77・78」が隣り合っており、向きもやや異なっていることが分かる。また、「78」を見ると窯体の横に細長い平場が残っていること

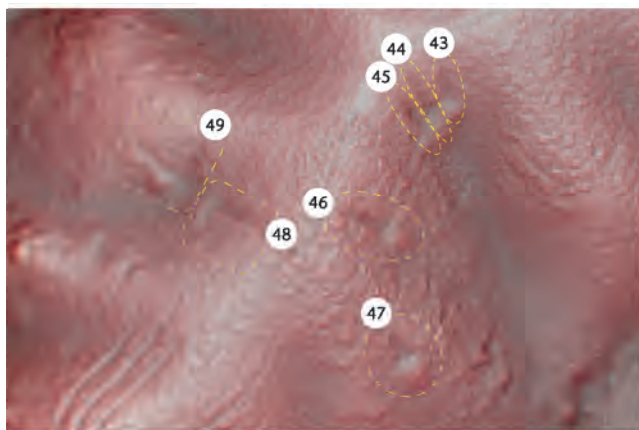


図10 踏査地点[43~49] (マップあいちに加筆)

も確認できる。ほかにも、図10は地点「43」~「49」の例だが、「43・44・45」は3基が隣り合って並んでいる。また、「47」は今回の踏査地点の中では珍しく、尾根付近ではなく尾根の中腹に位置していることが確認できる。また、「49」は先ほどの地点「78」と同様に、窯体の横に細長い平場が伸びている。

このように、八曾地区の事例では赤色立体地図でも窯跡の数や形状、方向、およその大きさなどについて確認することが可能であり、事

前にそのような情報を得たうえで踏査を行うことができるというのは大きな利点であろう。

さらに、窯跡の場所がピンポイントで映し出されるため、踏査の際の時間短縮にもつながる。この八曾地区は携帯電話の電波が届くという点もあり、スマートフォンでGPSを赤色立体地図と照らし合わせ、自分たちが今どこにいるのかをリアルタイムで確認しながら踏査を行うことができた。

しかし、今回のようにその場所が特定できるほど鮮明に映し出されるのはむしろまれな例だと考えている。赤色立体地図上で窯跡が確認できる条件としては、①「その窯の作業当時から地形の改変がないこと」と、②「窯が築かれた場所」、③「窯の構造」、この3点に注目して考察を加えてみたい。

まず、①「その窯の作業当時から地形の改変がないこと」についてである。これは住宅や工場を造るための開発や、畑として利用するための開墾などの人為的な改変はもちろん、土砂崩れや地すべりなどの自然的な改変も含まれる。

次に、②「窯が築かれた場所」に

注目したい。今回の踏査で確認した窯跡ほぼすべてが尾根のすぐ下に築かれていることから、上から堆積する土砂が少なく、天井が崩れた後の窯体の凹みがそのまま残存する可能性が高かったのかもしれない。また、堆積という面では窯跡がある地点周辺の樹木も重要で、針葉樹が広がっている地点と広葉樹が広がっている地点とは、特に後者の場合、腐葉土の堆積によって表面上では窯体の凹みが残りにくく、遺物の散布もわかりづらいように感じられた。

最後に、③「窯の構造」に注目してみよう。一般的に、山茶碗の窯は山の斜面をくり抜いて造られる「地下式あな窯」と呼ばれるものである。その後、くり抜いた土を使って前庭部の平場を造ると考えられている。今回の場合、窯体の凹みと平場、そして散布している遺物を窯跡の判断基準として踏査を進めていたが、堆積などで窯体の凹みがわかりづらい場合でも、平場の地形は残存していることが多く、この平場を見つけないという作業が踏査の一つのポイントであったと言える。

このように、私が考えうる限りでも、地形や堆積の状況、窯の築造場

所・構造などの条件が複雑に絡み合ってくるのが考えられる。例えば、他の地域や他の時代の窯跡、もしくは同じあな窯であっても、それ以前の須恵器や灰釉陶器の窯跡において、同様に赤色立体地図で窯跡が確認できるかどうかは一概には言い切れず、今後の調査事例の増加を待ちたい。

また、先ほど赤色立体地図の利点としてその場所がピンポイントで映し出されると記したが、それが本当に窯跡なのか、もしくは水が流れた跡や土が崩れた跡なのかは実際に現地に行ってみなければわからないことも多いであろうし、地図上のみで窯跡と確定することはできない。そして、踏査を行う過程で、周辺の地形や植生などにも目を向け、当時の人々がここでのように窯跡を経営していたのかを想像しながら、その空気を自分で「体感」するところまでが踏査の一環であり、考古学の醍醐味である。

## V おわりに

ここまで、概要という形にはなつてしまつたが、八曾地区で新たに発見した窯跡の現状報告と、窯跡の調査における赤色立体地図の活用について意見を述べた。犬山市の山茶碗窯跡というのは、岐阜県との県境付近に点々と確認できるくらいの認識であつたために、今回の八曾地区での踏査成果を含め、当時は100基を超える窯が操業する一大窯業地であつたというのは大変驚きである。これだけの窯跡があれば、当時は周辺一帯もはげ山になつていたのかもしれない。また、赤色立体地図でこれだけの窯跡が確認できるほど、当時の地形がりのままに残っているというのも貴重なことであると感ずる。この場所は当時の美濃国に面しているということもあり、市内の古代の灰釉陶器窯から出土した資料については、美濃系のそれと共通する点が多いという指摘もある（愛知県建築部・小牧市教委1976・大西2019）。このように、犬山市内の窯跡群は古代の段階から美濃国側からの影響を受けていた可能性も十分に考えられ、今後

市内の窯業遺跡をどのように位置付けていくことができるのか非常に楽しみな地域である。

八曾地区の窯跡群における今後の課題として、今回の踏査ではまずどれだけの窯跡が存在するのかを把握することを目的としていたこともあり、それぞれの地点における年代や採集遺物などの分析、特に、関係性が深いであろう岐阜県側の隣接する窯跡群との比較検討までは至ることができなかったため、まずは地区内における地点ごとの傾向や時期差などを明らかにしていきたい。まだまだ、八曾地区を含む犬山市内の窯跡踏査ははじまつたばかりであり、浮かび上がってくる課題も山積みである。また、既に埋蔵文化財包蔵地として登録されている市内の窯跡についても改めて踏査をする必要性があると感ずており、これからも研究に尽力していきたい。

最後に、本稿の執筆に際して下記の方々には現地踏査等で多大なご協力をいただいただけでなく、現地の状況・採集遺物の所見についてもご教授いただきました。心から感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

青木修・伊藤佑真・大西遼・楠美代子・小出一磨・城所李衣・鈴木智恵・寺井崇浩・中野耕司・中野晴久・永井碧・服部哲也・平野昌子・水野領介・望月友恵・山本智子

### 【引用・参考文献】

- (1) 愛知県建築部・小牧市教育委員会（編）1976『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』愛知県建築部・小牧市教育委員会
- (2) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会（編）1982『犬山市史資料編二自然』犬山市
- (3) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会（編）1983『犬山市史資料編三考古古代・中世』犬山市
- (4) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会（編）1995『犬山市史通史編下』犬山市
- (5) 大塚友恵2020『犬山市・宮裏池採集の灰釉陶器について』『研究紀要 遷波』第7号、ZPO法人古代遷波の里・文化遺産ネットワーク、21～25頁
- (6) 大西遼2019『愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ―猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・斎器の考古学的調査（付）美濃・伊勢の窯跡出土須恵器―』『愛知県陶磁美術館 研究紀要』第24号、愛知県陶磁美術館、72～85頁
- (7) 可児市（編）2005『可児市史 第一巻通史編考古・文化財』可児市
- (8) 多治見市教育委員会（編）1991『北小本古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- (9) 多治見市文化財保護センター（編）2001『北小本―北小本古窯跡群第2次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- (10) マップあいち 愛知県文化財マップ 埋蔵文化財 記念物  
<https://maps.pref.aichi.jp/map/view/map.jsp?mid=20055>

(11) マップあいち 森林情報マップ（令和6年4月1日以降適用版）  
<https://maps.pref.aichi.jp/map/view/map.jsp?mid=21287>

(12) 山本智子2020『中世東濃窯の研究』愛知学院大学文学研究科博士論文

(13) 横山住雄 1985『犬山の歴史散歩』横山住雄

## 犬山窯跡踏査 (2024年12月～)

|        | 調査日        | 下                     | 北緯座標 (約) (東経座標)          | 標高     | 調査者            | 採集遺物                    | 備考             |
|--------|------------|-----------------------|--------------------------|--------|----------------|-------------------------|----------------|
| 地点 1   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363193/E 137.035621 | 240.3m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋、重ね                |                |
| 地点 2   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363126/E 137.035287 | 240.7m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋                   |                |
| 地点 3   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362394/E 137.035003 | 241.1m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋、重ね                |                |
| 地点 4   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362303/E 137.034723 | 237.3m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、小皿、蓋(小皿有)、重ね        | 隣接して築かれる       |
| 地点 5   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362238/E 137.034667 | 236.1m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、小皿、蓋(小皿有)、重ね        |                |
| 地点 6   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361595/E 137.033156 | 231.1m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋、焼台、窯壁             |                |
| 地点 7   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361734/E 137.032413 | 227.1m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋、焼台                | 隣接して築かれる       |
| 地点 8   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361779/E 137.032342 | 227.4m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋ね、焼台               |                |
| 地点 9   | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361740/E 137.032260 | 225.0m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、小皿、焼台               |                |
| 地点 1 0 | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362004/E 137.031286 | 228.0m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗                     | 隣接して築かれる、遺物少量  |
| 地点 1 1 | 2024/12/25 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361950/E 137.031228 | 224.9m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | x                       |                |
| 地点 1 2 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363896/E 137.045349 | 264.4m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、蓋、重ね、焼台             |                |
| 地点 1 3 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363071/E 137.044390 | 263.9m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿                  |                |
| 地点 1 4 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362213/E 137.044260 | 266.5m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、蓋、重ね、焼台          | 隣接して築かれる       |
| 地点 1 5 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362190/E 137.044278 | 267.4m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、蓋ね、焼台            |                |
| 地点 1 6 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361935/E 137.044694 | 265.7m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、重ね、焼台            | 隣接して築かれる、平場共有か |
| 地点 1 7 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           |                          |        | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、重ね、焼台            |                |
| 地点 1 8 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361975/E 137.044260 | 267.2m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、蓋、重ね             |                |
| 地点 1 9 | 2024/12/29 | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.366168/E 137.036375 | 250.7m | 兼松肇弘・中野耕司      | -                       | ※赤色立体地図外、確認のみ  |
| 地点 2 0 | 2025/1/4   | リトルワールド東方丘遺 (今井孝成沢)   | N 35.374843/E 137.018166 | 203.9m | 兼松肇弘           | 山茶碗、焼台、窯壁               |                |
| 地点 2 1 | 2025/1/4   | リトルワールド東方丘遺 (今井孝成沢)   | N 35.374551/E 137.018810 | 201.3m | 兼松肇弘           | 山茶碗、焼台、窯壁               | 遺物少量           |
| 地点 2 2 | 2025/1/13  | 可児やすらぎの東南方丘遺 (今井孝成八洞) | N 35.379476/E 137.005517 | 164.3m | 兼松肇弘           | 山茶碗、焼台                  |                |
| 地点 2 3 | 2025/1/13  | 可児やすらぎの東南方丘遺 (今井孝成八洞) | N 35.378565/E 137.003307 | 161.2m | 兼松肇弘           | 山茶碗                     | 遺物少量           |
| 地点 2 4 | 2025/1/13  | 可児やすらぎの東南方丘遺 (今井孝成八洞) | N 35.377187/E 137.000991 | 155.5m | 兼松肇弘           | 山茶碗、焼台                  |                |
| 地点 2 5 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.364340/E 137.047898 | 275.9m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗(片口)、小皿、大皿(?)、焼台     | 隣接して築かれる       |
| 地点 2 6 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.364297/E 137.047765 | 275.7m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗(片口、穿孔)、小皿、蓋、焼台、窯壁   |                |
| 地点 2 7 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363747/E 137.047180 | 275.4m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿(穴書き?有)、蓋(小皿有)、焼台 | 窯体の西脇に平場有、小皿多量 |
| 地点 2 8 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363440/E 137.046945 | 271.7m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、重ね、蓋、焼台             |                |
| 地点 2 9 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363388/E 137.046813 | 271.4m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、焼台                  |                |
| 地点 3 0 | 2025/1/23  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.363130/E 137.046630 | 267.8m | 兼松肇弘・中野耕司      | 山茶碗、小皿、重ね、焼台            |                |
| 地点 3 1 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.360023/E 137.033609 | 227.8m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗(穿孔)、小皿、大皿(?)、蓋      | 隣接して築かれる       |
| 地点 3 2 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.359961/E 137.033440 | 225.3m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗(穿孔)、小皿、蓋            |                |
| 地点 3 3 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.359835/E 137.033354 | 225.1m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗(穿孔)、小皿、蓋            |                |
| 地点 3 4 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.358511/E 137.032618 | 230.0m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗、焼台                  | 隣接して築かれる、遺物少量  |
| 地点 3 5 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.358518/E 137.032574 | 229.8m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗、焼台                  |                |
| 地点 3 6 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.356044/E 137.033759 | 216.3m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗、蓋                   | 隣接して築かれる       |
| 地点 3 7 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.355987/E 137.033787 | 217.2m | 兼松肇弘・平野昌子      | x                       |                |
| 地点 3 8 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.355900/E 137.033441 | 219.0m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、焼台               | 隣接して築かれる       |
| 地点 3 9 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.355788/E 137.033439 | 219.8m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿                  |                |
| 地点 4 0 | 2025/1/29  | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.361255/E 137.036189 | 232.3m | 兼松肇弘・平野昌子      | 山茶碗                     | 遺物少量           |
| 地点 4 1 | 2025/2/4   | 八幡山西麓 (字八幡)           | N 35.362607/E 137.047983 | 274.9m | 兼松肇弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、蓋                   |                |

|       |           |                              |                          |        |                |                  |                   |  |
|-------|-----------|------------------------------|--------------------------|--------|----------------|------------------|-------------------|--|
| 地点4 2 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361931/E 137.047956 | 272.3m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 |                  |                   |  |
| 地点4 3 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361529/E 137.047110 | 270.3m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、薑            |                   |  |
| 地点4 4 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361495/E 137.047071 | 269.3m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗              | 隣接して築かれる          |  |
| 地点4 5 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361450/E 137.047035 | 268.7m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、薑            |                   |  |
| 地点4 6 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361162/E 137.046913 | 266.9m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、小皿、薑         |                   |  |
| 地点4 7 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.360830/E 137.047005 | 256.5m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | ×                | ミダで遺物採集できず        |  |
| 地点4 8 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361244/E 137.046362 | 264.3m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗              |                   |  |
| 地点4 9 | 2025/2/4  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361295/E 137.046255 | 261.6m | 兼松薬弘・服部哲也・望月友恵 | 山茶碗、焼台           |                   |  |
| 地点5 0 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.361184/E 137.048950 | 270.3m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、薑、焼台         |                   |  |
| 地点5 1 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.359761/E 137.048636 | 262.6m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿、薑         |                   |  |
| 地点5 2 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.359530/E 137.048210 | 258.7m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿           |                   |  |
| 地点5 3 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.359031/E 137.047700 | 259.7m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、薑、重ね         | 隣接して築かれる、平場共有か    |  |
| 地点5 4 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) |                          |        | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、薑、重ね         |                   |  |
| 地点5 5 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.358447/E 137.047409 | 249.8m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、薑(小皿有)       |                   |  |
| 地点5 6 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357984/E 137.046878 | 249.3m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿           | 隣接して築かれる          |  |
| 地点5 7 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357930/E 137.046801 | 247.0m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿           |                   |  |
| 地点5 8 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357659/E 137.046530 | 248.5m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿、蓋、瓶類、薑、焼台 | 隣接して築かれる          |  |
| 地点5 9 | 2025/2/10 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357694/E 137.046571 | 247.1m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、小皿、蓋、瓶類、薑、焼台 |                   |  |
| 地点6 0 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357693/E 137.046011 | 250.8m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、薑         | 隣接して築かれる          |  |
| 地点6 1 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357568/E 137.045911 | 251.7m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿           |                   |  |
| 地点6 2 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357238/E 137.045831 | 249.2m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、薑         |                   |  |
| 地点6 3 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356841/E 137.044935 | 240.1m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、蓋(小皿有)    |                   |  |
| 地点6 4 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356619/E 137.043640 | 243.7m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、焼台        |                   |  |
| 地点6 5 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356334/E 137.042772 | 244.1m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、薑、重ね、焼台   |                   |  |
| 地点6 6 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356051/E 137.044505 | 245.7m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、重ね、焼台        |                   |  |
| 地点6 7 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356051/E 137.044470 | 246.1m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、焼台           | 隣接して築かれる          |  |
| 地点6 8 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356041/E 137.044409 | 246.4m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、重ね           |                   |  |
| 地点6 9 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.356046/E 137.044363 | 247.2m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、重ね           |                   |  |
| 地点7 0 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.355293/E 137.043305 | 247.9m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、薑、重ね      | 隣接して築かれる          |  |
| 地点7 1 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.355295/E 137.043285 | 247.4m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、薑、重ね      |                   |  |
| 地点7 2 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.354594/E 137.043855 | 230.5m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗              |                   |  |
| 地点7 3 | 2025/2/26 | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.354495/E 137.043462 | 232.8m | 兼松薬弘・水野徹介      | 山茶碗、小皿、専用蓋、焼台    | 面路に平場伸びる          |  |
| 地点7 4 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.358846/E 137.049185 | 262.1m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗              |                   |  |
| 地点7 5 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.357043/E 137.048682 | 260.9m | 兼松薬弘・平野昌子      | ×                | 築(?)              |  |
| 地点7 6 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.355871/E 137.048384 | 243.0m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、薑、焼台         | 隣接して築かれる、左側に平場伸びる |  |
| 地点7 7 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.355846/E 137.048298 | 244.8m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、蓋、焼台      |                   |  |
| 地点7 8 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.355819/E 137.048258 | 244.5m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、薑、焼台      |                   |  |
| 地点7 9 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.354386/E 137.048044 | 239.1m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、重ね        |                   |  |
| 地点8 0 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.354385/E 137.047986 | 238.8m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、薑、重ね、焼台   | 隣接して築かれる          |  |
| 地点8 1 | 2025/3/7  | 八曾山 <small>赤</small> 麓 (字八曾) | N 35.354396/E 137.047934 | 238.6m | 兼松薬弘・平野昌子      | 山茶碗、小皿、薑、重ね、焼台   |                   |  |
| 地点8 2 | 2025/3/13 | 八曾山 <small>西</small> 麓 (字八曾) | N 35.358394/E 137.030102 | 214.7m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、焼台           | 遺物少量              |  |
| 地点8 3 | 2025/3/13 | 八曾山 <small>西</small> 麓 (字八曾) | N 35.354543/E 137.028402 | 192.6m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、重ね、焼台        |                   |  |
| 地点8 4 | 2025/3/13 | 八曾山 <small>西</small> 麓 (字八曾) | N 35.354702/E 137.033756 | 203.8m | 兼松薬弘・中野耕司・鈴木智恵 | 山茶碗、薑、焼台         |                   |  |

表 1 各地点の踏査記録表

# 西南戦争を戦った小牧市出身兵士の墓を訪ねて

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

服部 哲也

## 1. はじめに

郷土の兵士が西郷どんとの戦い（西南戦争）に参加したことは、研究紀要『瀬波』7号、8号（註1）にて紹介したが、その後も機会があればゆかりの地を訪れることにしている。今回は小牧市出身兵士二人の墓について紹介したい。

## 2. 西尾五左衛門の墓を訪ねて

### 小牧市大草の従軍者碑

小牧市大草に所在する福蔵寺墓地



写真1  
小牧市大草の「従軍者」碑

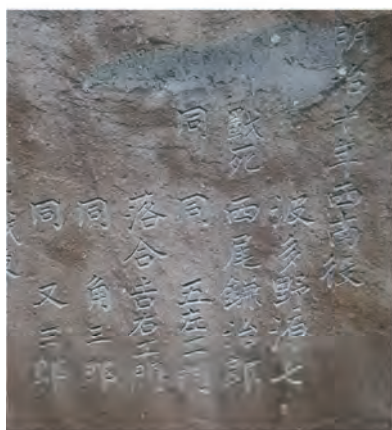


写真2 西南戦争「従軍者」名

には、大正12年（1923）大草区の建立による「従軍者」碑がある（写真1）。主に日清日露の従軍者であるが、この地区から戦地に就いた82名の名前が連なる。その最初は「明治十年西南役」であり、地区から「波多野源七・西尾鎌次郎・西尾五左衛門・落合吉右衛門・落合角三郎・落合又三郎」の6名が従軍したこと、そのうち西尾五左衛門と西尾鎌次郎が戦死したことが刻まれている（写真2）。今回、西尾五左衛門の墓を訪ねることとし

た（註2）。

なお、明治十年に亡くなった五左衛門と鎌次郎の名が刻まれた「西尾家」の墓石を、福蔵寺墓地内にて探したが発見はできなかった。その子孫が、現在にまで繋がっているのかは不明である。

### 近衛兵西尾五左衛門の転戦

西尾五左衛門は近衛歩兵第2連隊第1大隊第3中隊（士官5名、下士官20名、卒161名）に所属した。近衛兵は天皇に直隸の壮兵であり、徴兵された農民・商人出身者の鎮台兵とは違い元武士である士族が多い。近衛兵の帽子には赤いラインが入った（鎮台兵は黄ライン）ため、薩摩兵も「赤帽」と呼び恐れた。西南戦争での近衛兵は3020名で全兵力の約7%であつたとされる。

西南戦争時、西尾五左衛門の所属中隊は第三旅団に編入された。同中隊の転戦地は『靖國神社忠魂史 西南の役』により表1にまとめたが、終戦まで186名中42名の戦死者を出している。特に山鹿での戦いと佐敷・大田方面での戦いが熾烈であつたことが分かる。西尾五左衛門の死も所属中隊として最も多くの戦死者13名をだ

した、5月19日葦北郡大關山の戦闘においてであつた。

### 葦北郡大關山の戦い

熊本城を攻略できず北上も阻止された薩摩軍は、4月下旬、熊本最南部の盆地人吉に後退し本営を置いた。薩摩軍にとって人吉は、しばし休息の地でもあつたが、その静けさもつかの間、5月中旬からは人吉に迫る政府

表1 近衛歩兵第2連隊第1大隊第3中隊の転戦先と戦死者数

| 戦いの日             | 戦いの場所       | 戦死者数  |
|------------------|-------------|-------|
| 明治10年2月25日       | 政府軍第3旅団に編入  |       |
| 明治10年3月10日～15日   | 山鹿方面での戦い    | 12名戦死 |
| 明治10年3月30日～4月5日  | 鳥栖方面での戦い    | 5名戦死  |
| 明治10年4月16日～20日   | 大津方面での戦い    | 1名戦死  |
| 明治10年5月18日～29日   | 佐敷・大田方面での戦い | 21名戦死 |
| 明治10年6月19日～7月24日 | 都城方面での戦い    | 2名戦死  |
| 明治10年8月31日～9月24日 | 城山での戦い      | 1名戦死  |
| 明治10年9月24日～28日   | 終戦          | 帰還命令  |

軍と迎え撃つ薩摩軍の激戦が再開する。葦北郡大關山は人吉の西にあたり、追いつめる政府軍、食い止めようとする薩摩軍の山中での激戦であった。

西尾五左衛門が戦死した、明治10年5月19日の戦闘の様子を『征西戦記稿』では「19日午前10時賊又上木場を侵し正面左翼を猛撃す我兵奮激必死格闘すれ共彼益々兵員を増し勢い頗る猖獗我兵最も苦戦し午後6時遂に退きて三十丁坂の上に抛り力をつくして之を拒く」とある。

薩摩軍の猛攻撃を受けて陣を後退した政府軍の負け戦であり、1日で死者14名、負傷者54名（もちろん政府軍だけ）という甚大なる被害を出した。そのし烈さは同日に15人もの失踪兵士が出たことからもうかがい知ることができる。その後、政府軍は猛烈に反撃し、6月1日には人吉を占拠。さらに薩摩軍を追い詰めることとなる。

### 西尾五左衛門の墓を訪ねて

2024年師走、九州を旅した折に西尾五左衛門の墓を訪ねた。前日は人吉に泊り、温泉と球磨焼酎に西郷どん暫しの安

らぎに思いを馳せた。一方、政府軍の砲台を敷設した高台なども訪れ、その静けさを突き破る轟音を感じたりもした。西尾五左衛門戦死の地である大關山も訪ねてみたかったが、周辺は2020年の豪雨災害の傷がまだまだ残っており、残念ながらあきらめざるを得なかった。

西尾五左衛門の眠る「芦北町峰崎官軍墓地」（別称「葦北郡佐敷町官軍墓地」熊本県葦北郡芦北町花岡字峰



写真3 芦北町峰崎官軍墓地（手前左端が西尾五左衛門の墓石）



図1 西尾五左衛門戦死推定地とその墓（国土地理院地図に加筆）

崎)は、明治10年5月14日から6月20日にかけての和久道・大関山・芦北方面の戦いで戦死した将校3名、下士官17名、兵卒66名、計86名(愛知県出身者は6名)が眠る(写真3)。うち60名は西尾五左衛門の戦死した大関山をめぐる攻防戦で、あらためて激戦であったことを知る(図1)。

墓地は芦北の街を見下ろす小高い山の中腹にあった。芦北はデコポンをはじめとした柑橘系果実が有名な街で、墓地も柑橘系果樹園に囲まれていた。現在は葦北町の指定文化財として保存管理されており、2023年設置の新しい解説と墓碑配置図によって、西尾五左衛門の墓碑もすぐにはわかった(写真4)。墓石は天草砂岩製で、明治13年に作られたものであるが傷みも少なく刻まれた文字もはっきりと読むことができる。天草砂岩は古墳時代から使われており、その質の良さをうかがい知ることができる。墓碑は表面「陸軍兵卒 西尾五左衛門之墓」裏面「愛知県尾張国東春日井郡大草村平民」(写真5) 右面「近衛歩兵第三連隊第一大隊第三中隊」左面「明治十年五月十九日於熊本縣下肥後國葦北郡大関山戦死」と刻まれていた。合掌。

### 3. 安達文左衛門の墓を訪ねて

#### 真田山陸軍墓地

安達文左衛門の死に至るまでの足跡は『瀧波』8号に記した。西南戦争を戦い抜き、安堵の気持ちで帰路に就いた矢先、コレラに感染しての非業の死であった。安達文左衛門の墓は小牧市久保一色真福寺墓地にもあるが、これは郷里の墓。亡くなったのは西京虎烈刺病室(京都府陸軍避病院)であり、遺骨は大阪の真田山陸軍墓地に運ばれて埋葬された可能性が高い。

真田山陸軍墓地は、明治4年に創設された日本で最初の陸軍墓地であり、佐賀の乱から太平洋戦争に至る5299基以上の墓碑があったとされている。

うち、時代が判明しているのは4870基であり、西南戦争墓碑は日清戦争1377基に次ぐ767基が確認されている(註3)。明治10年2月に始まった西南戦争は熾烈を

極め、多くの死傷者を出す。4月には大阪に陸軍臨時病院が新たに設置され、病傷兵の多くは大阪に送られて治療を受けることとなった。それは大阪で死亡する兵士が増加することとなり、真田山陸軍墓地に西南戦争の墓が多いゆえんでもある。

#### 安達文左衛門の墓を訪ねて

前稿では「旧真田山陸軍墓地墓碑銘文一覽」(註4)にあるB-39-2番と付された「陸軍□卒 安□文佐□□」(□は判読不明とされていた)を、安達文左衛門の墓石ではないかと推測した。2024年晩秋、ようやくその墓石を確認するため真田山陸軍墓地を訪

れた。

JR大阪環状線の玉造駅にて下車し西へ。途中、真田信繁(幸村)が坂冬の陣に築いた出丸(真田丸)跡を三光神社に訪ね、幸村の像や真田の抜け穴を見学する。いよいよと勇んで墓地を訪れるが、なんと、墓地全体が工事中で立ち入りが禁止されているではないか！諦めきれずに管理する真田山陸軍墓地維持会に連絡したところ、快く入場を御許可いただいた。



写真5 出身地「大草」



写真4 西尾五左衛門の墓石



写真6 真田山陸軍墓地

感謝申し上げます（写真6）。

早速B-39-2の識別番号の墓石にご対面。墓石は3カ所で折れ、4面のうち右面は剥離破損のため判読不能であった。しかし、折れはモルタルで接合修復されていたため、3面の文字は十分読むことができた。安達文左衛門の墓で間違いない（写真7）。折損のままで判読が難しかったと思われ、墓碑の修復に努力を続けてこられている真田山陸軍墓地維持会には感謝しかない。重ねてお礼申し上げます。

墓碑は、正面「陸軍兵卒 安達文左衛門「之墓」裏面「愛知縣尾張國東春日井郡久保一「色」村平民」（写真8）左面「明治十年十月十日 罹虎列刺病同月十一「旦」死」（「」は推定）と刻まれていた。死因である「虎列刺（コレラ）」の文字もハッキリとわかり（写真9）、感染症での無念の死を一層感ずることとなった。

合掌。

#### 4. おわりに

真田山陸軍墓地には真田山陸軍墓地維持会による説明看板が立つ。その文の最後は「ここを訪れる方々は、整然と並んだ多くの将兵の墓碑にまづ圧倒され、そしてそこに刻まれた文

字を読み取るとき、必ずや平和の尊さを実感されるものと存じます。」と結ばれている。

今回、「真田山陸軍墓地」と熊本の「芦北町峰崎官軍墓地」とをめぐってきたが、その整然と並ぶ墓碑群、私には亡くなった数多の兵士達<sup>あまた</sup>が整列しているように見えた。そして、その隊列の中に、我が郷里からの兵士もいることは、見知った顔がそこにあるようにも思えてくるのである。それは、まさに戦争の愚かさを身近に感じ、平和の尊さを実感する機会であった。文化遺産から戦争と平和を感じることが出来る！それが地域で活動する目的の一つでもある。二つの旅を終え、あらためてそう思った。

#### 【註】

- (1) 服部2002「西南戦争で戦死した仙石庄之助さん（栗栖村出身）の足跡を訪ねて」『瀬波』7号。服部2021「虎列刺（コレラ）に斃れた郷土の兵士―西南戦争外伝―」『瀬波』8号
- (2) 西尾鎌次郎は現在の大分市鶴崎の病院にて病死とされ、その墓は大分県護国神社境内の「西南の役軍人墓地」にある。こちらへもいずれは訪れてみたい。
- (3) 公益財団法人真田山陸軍墓地維持会ホームページ [www.sanadayama.or.jp](http://www.sanadayama.or.jp)
- (4) 新井勝紘・一ノ瀬俊也編2003「慰霊と墓―旧真田山陸軍墓地概要図・墓碑銘文一覽」『国立歴史民俗博物館研究報告第102集』国立歴史民俗博物館

【参考・引用】  
1990『靖國神社忠魂史 西南の役』復刻版 青潮社  
1887『征西戦記稿』参謀本部陸軍部編纂課 編



写真9  
刻まれた「虎列刺」の文字



写真8  
出身地「久保一色」



写真7  
安達文左衛門の墓石

# 羽黒村・池野村における近現代の瓦製造

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

望月 友恵

## 1. はじめに

犬山市の東部にある丘陵一帯には瀬戸層群とよばれる陶土層が分布しており、この資源を利用して古代から陶器生産が行われていたことが遺跡の存在から分かっている。現在、長者町団地がある通称「金山」という小高い丘でも灰釉陶器や布目瓦が採集されており、古代にこれらを生産していた窯があったようである。

以前、当地域における古代の窯業について講座をした際、地元住民の方から昭和時代にも「金山」の土を使って瓦を生産していたという情報を写真とともにご提供いただいた。現在、犬山市域における窯業生産は「犬山焼」を生産する窯元が数軒残るのみになっているが、羽黒地区や池野地区においても、古代と同様に地域の資源を利用した地場産業が、昭和時代まで続いていたということ

に大変興味を持った。

しかし、瓦製造所がすべてなくなった今、この地域で瓦製造があったことを知る人も少なく、また、かつて瓦製造のために原土が採掘されていた「金山」も住宅街に生まれ変わり、当時の様子を窺い知ることは難しい。そこで本稿では、地元住民への聞き取り調査などで分かった、近現代における羽黒村・池野村での瓦製造の概況を書き留めたい。

## 2. 犬山城下における瓦生産

まず、犬山城下における近世までの瓦製造の様子を紹介したい。「むかし、御城御造営之節、斎賀六左衛門と云者、瓦坂にて製したるよし聞き侍る、今は市郎兵衛、百年前に濃州不破郡赤坂より御呼よせにて製すと云」と『犬山里語記』にあり、犬山城を築城する際に瓦坂（現在の内田防災公園の南西、新郷瀬川沿い）

に瓦生産者があったことが伝えられている。その後、美濃の赤坂から犬山城下に移住してきた高山市郎兵衛が城下で瓦生産を行っていた。後年、高山氏は余坂に店を構え犬山藩お抱えの御用瓦師として活躍し、犬山城の鯉瓦も製作している。

文政10（1827）年、春日井郡林村（現小牧市林）で製瓦業を営んでいた尾関常八が、高山氏から御用瓦師の株を譲り受け、その長男・作十郎（初代尾関作十郎）が犬山において瓦製造を始めた。尾関氏は天保13（1842）年に余坂村で大火に遭うが、丸山新田に移住し瓦製造を続け、慶應3（1842）年には陶器製造も開始し、現在まで継承される犬山焼につながっている。犬山で製造された瓦は「犬山瓦」と呼ばれ親しまれていたようである。

犬山町内での瓦製造は明治時代に入っても続けられ、明治42年には3ヶ所、昭和9年には2ヶ所の製瓦工場が操業していた（表1）。

## 3. 羽黒・池野村にあった瓦製造所

### 地元住民への聞き取り調査

羽黒村、池野村の瓦製造業について、かつて瓦製造を行っていた製造

表1 犬山周辺における明治～昭和の瓦製造  
（犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編1995より一部改変）

| 町村  | 年度    | 種目 | 工場数 | 職工数        | 数量（個）   | 価格（円）  |
|-----|-------|----|-----|------------|---------|--------|
| 犬山町 | 明治42年 | 陶器 | 5   | 41         | 500,000 | 18,550 |
|     |       | 製瓦 | 3   | 15         | 89,000  | 3,026  |
|     | 昭和9年  | 陶器 | 6   | 27（男20 女7） |         |        |
|     |       | 製瓦 | 2   | 12（男12）    |         |        |
| 城東村 | 大正元年  | 陶器 | —   | —          | —       | 500    |
|     |       | 瓦  | —   | —          | —       | 1,200  |
|     | 昭和11年 | 陶器 | —   | —          | —       | 600    |
|     |       | 瓦  | 2   | 5          | —       | 530    |
| 羽黒村 | 昭和4年  | 瓦  | 3   | —          | 32,000  | 19,000 |
|     | 昭和13年 | 瓦  | 4   | 16         | 180,000 | 9,015  |

（『町村要覧』などから作成）

所4軒（a～d）のご子孫・親類の方々からお話を伺うことができた。4軒とも昭和40年以前には廃業していたようで、聞き取り調査を受けていただいた4名の方は瓦製造業を受け継いではいないが、幼少・青年期の記憶をもとに当時の様子をお話いただいた。cとdの製造所については、当時の様子を撮影した写真をご提供いただいた。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

近隣の需要に比べ、  
は多くても15名程度  
であることから、  
程度の小規模な事業  
規模だったことが窺  
える。ご子孫への聞  
き取りはできなかつ  
たが、a・d以外  
にも羽黒村金山にも

- a. 羽黒村南郷の瓦製造所
  - ・敷地内に窯があり、瓦を製造していた。
  - ・伊勢湾台風(昭和34(1959年))頃に新築を建てる際に瓦を生産し、その直後に廃業した。
- b. 羽黒村赤坂の瓦製造所
  - ・1900年生まれの子の祖父の代で操業していた。
  - ・長者町の辺りまで原土を取りに行っていたそうだ。
  - ・製造した鬼瓦が市内の寺にある。
- c. 羽黒村金山の瓦製造所
  - ・屋号を「又市」としていた。
  - ・自身から4代前の曾祖父の時代に創業、幕末〜明治頃だと思われる。
  - ・昭和40年代の後半に廃業した。

- ・原土の採掘から陶土の精製、瓦の成形、乾燥、焼成まで行なっていた。
- ・原土の赤土は裏の山で採掘できた。
- ・粘土とスサの入った土を混ぜ合わせ、足で踏み粘土を練った。
- ・住み込みの職人が数人いた。
- ・鬼瓦については、朝日に鬼師がいて注文して作ってもらっていた。
- ・成形は型成形だったのが、いつ頃からプレス成形に変わった。
- ・窯はいわゆる「だるま窯」と呼ばれる窯で、1日半から2日間ほどかけて燃焼し、1回で300〜400枚くらいの瓦が焼けた。
- ・窯焼の時は、真っ黒な黒煙があがっていた。
- ・窯の燃料は石炭だったが、重油の時もあった。
- ・金山にはもう1軒瓦屋があった。

- 【写真1〜4】(長岡昭雄氏提供)
- 昭和40年代のb瓦製造所の様子。写真1には、作業小屋とその左手に「だるま窯」がみえる。写真4の奥には土置き場が写っている。
- d. 池野村稲干場の瓦製造所
  - ・初代は奥村忠八で、創業は万延元(1860)年と伝えられている。
  - ・初代から4代まで、昭和30年末頃まで操業をしていた。
  - ・住み込みで職人がおり、一番多い時で15人ほどいた。
  - ・原土は裏山から採掘していた。山にトロッコがあり、運んでいた。
  - ・「だるま窯」が2基あった。
  - ・燃料として奥入鹿から材木を購入していたが、戦後は石炭となった。
  - ・重油は使用しなかった。

- ・犬山、大口、小牧など近隣町村が商売圏だったように記憶している。
- ・昭和9(1934)年の室戸台風、昭和34(1959)年の伊勢湾台風の際には注文がたくさん入った。
- 【写真5】(奥村文秀氏提供)
- 昭和32年頃のd瓦製造所の様子。「だるま窯」から黒煙があがっている。
- e. その他
  - ・入鹿池付近や桑田の荒井、倉曾洞の辺りにも瓦屋があった。
- 聞き取り調査によつて、羽黒村南郷・赤坂・金山、池野村稲干場で瓦製造所が操業していたことが分かった。これらの製造所では原土の採掘から製品の成形、焼成までを一貫して行っていた。職人は多くても15名程度であることから、近隣の需要に比べ、程度の小規模な事業規模だったことが窺える。ご子孫への聞き取りはできなかつたが、a・d以外にも羽黒村金山にも

う1軒、入鹿池付近、桑田村荒井にも製造所があったようである。犬山城下では、藩体制下から瓦製造が行われていたが、羽黒村・池野村周辺では、早くとも江戸時代末以降に製造所の操業が開始され昭和40年代まではほとんどが姿を消したようである。

### 統計資料からみる瓦製造所

#### (1)『全国工場通覧』

『全国工場通覧』は、全国にある工場（5名以上の従業員が在籍する）の一覧で、昭和6（1931）年版から1996（1997）年版まで刊行されている。この昭和7（1932）年版には、昭和5（1930）年における全国の工場一覧が記載されており、当地域の屋根瓦製造所として中村瓦製造所、奥村瓦製造所、尾関製瓦工場の3軒が記載されている。奥村瓦製造所は、先述した聞き取り調査のdにあたる。中村瓦製造所については、ご子孫への聞き取り調査はできなかったが、入鹿池近辺にあったと聞き伝えられている1軒であろう。なお羽黒村の瓦製造所の記載がないが、職工数が4人以下のため記載のない可能

性が考えられる。

以下に、『全国工場通覧』昭和7（1932）年7月版（商工省編纂、日刊工業新聞社発行）より記載内容を抜粋した（一部改変）。

・中村瓦製造所  
所在地 愛知縣丹羽郡池野村篠平  
開業年月 大正9年3月  
生業品目 黒色素焼瓦  
代表者 中村佐吉  
使用職工数 A（註）  
・奥村瓦製造所  
所在地 愛知縣丹羽郡池野村稲干場  
開業年月 慶應2年1月  
生業品目 黒色素焼瓦  
代表者 奥村健一郎  
使用職工数 A  
・尾関製瓦工場  
所在地 愛知縣丹羽郡犬山町犬山  
開業年月 寛保元年  
生業品目 黒色素焼瓦  
代表者 尾関作十郎  
使用職工数 A

#### (2)『愛知の窯業』

『愛知の窯業』は、昭和10（1935）年における県下の窯業の概況を、統計的にまとめた報告書

で、昭和11（1936）年8月に愛知縣総務部統計調査課から発刊されている。瓦の項には、昭和10年にお

表2 市町村別 瓦生産額（昭和10年）（愛知縣総務部統計調査課1936より一部改変）

| 町村  | 製造場数 | 職工数（年末現在） |    |   | 総価額    | 屋根用平瓦     |        | その他   |
|-----|------|-----------|----|---|--------|-----------|--------|-------|
|     |      | 総数        | 男  | 女 |        | 数量        | 価格     |       |
| 丹羽郡 | 13   | 50        | 44 | 6 | 29,060 | 6,454,000 | 25,020 | 4,040 |
| 桑田村 | 1    | 5         | 4  | 1 | 1,390  | 24,000    | 1,200  | 190   |
| 羽黒村 | 4    | 16        | 16 | - | 7,000  | 180,000   | 6,300  | 700   |
| 池野村 | 3    | 13        | 10 | 3 | 6,250  | 115,000   | 4,600  | 1,650 |
| 城東村 | 1    | 3         | 2  | 1 | 5,300  | 160,000   | 4,800  | 500   |
| 犬山町 | 2    | 8         | 8  | - | 6,750  | 115,000   | 5,750  | 1,000 |
| 扶桑村 | 1    | 2         | 2  | - | 800    | 20,000    | 800    | -     |
| 岩倉町 | 1    | 3         | 2  | 1 | 1,570  | 31,400    | 1,570  | -     |

表3 羽黒村の瓦製造場 昭和14年2月統計  
（犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編1989より一部改変）

|      |         | 数量     |    |    |
|------|---------|--------|----|----|
| 製造場数 | 男       | 4      | 16 | —  |
|      | 女       | —      |    |    |
|      |         | 数量     | 価格 | 単価 |
| 屋根瓦  | 180,000 | 9,000円 | 5銭 | —  |
| 其ノ他  | —       | 15円    | —  | —  |
| 計    | —       | 9,015円 | —  | —  |

ける各市町村の瓦製造所数や、職工数、産出額などが記載されており、丹羽郡では13ヶ所の瓦製造所があったことが分かる（表2）。羽黒村、池野村、犬山町だけでなく、桑田村、城東村にも製造所があった。なお、同報告書によると、昭和10年における愛知県下の瓦製造所数は824軒で、そのうち、現在も三州瓦の主産地である碧海郡だけで487軒あり、半数ちかくを占めている。また昭和9年の愛知県の瓦産出額は全国一位であった。

#### (3) 羽黒村の産業統計報告

『犬山市史 史料編六』には、昭和



写真6



写真8



写真10



写真12



写真14



写真15



写真7

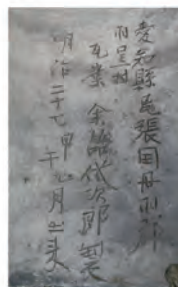


写真9

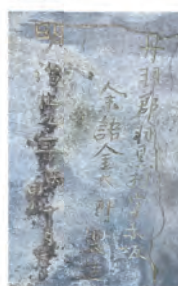


写真11

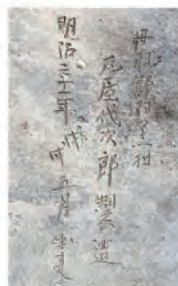


写真13

14（1939）年に統計された羽黒村の産業統計報告が記載されている（表3）。（2）の報告書と同様に羽黒村には4軒の製造所があったことが報告されている。これらの製造所は聞き取り調査を行ったa・cの3軒と、羽黒村金山にあったもう1軒の製造所であろう。

以上、聞き取り調査や資料などから、羽黒村、池野村では幕末頃に瓦製造が始められ、戦前には桑田村、城東村、犬山町と合わせて10軒を超える瓦製造所が操業していたことが

分かった。これらの製造所は、職工数が5人前後の小規模な家庭内工業的な経営であったことが推測される。

幕末以降、当地に瓦製造所が新たに設けられていった背景としては、この頃には町屋や社寺建築だけでなく一般庶民の住居にも瓦葺き屋根が普及し、瓦の需要が急速に拡大していったことが考えられる。瓦製造に適した原土が採掘できる羽黒村や池野村の丘陵一帯は、新たな産業の開拓の場として、うつつつけの場所だったのであろう。また、こうした

住居環境の変化とともに、江戸時代には設けられていた窯株制度が明治時代以降廃止されたことも、瓦製造所が複数設けられていった要因の一つとなったのであろう。

しかし、戦後は製造の機械化が進み工場での大量生産が中心となり、加えて交通網の発展で遠方からも瓦の供給が容易になったことで、小規模な当地の瓦製造所は、職人離れや周辺の宅地開発なども相まって、昭和時代の後半にはすべて廃業していったようである。

#### 4. 羽黒村銘のある瓦

羽黒村、池野村の瓦製造について調べ始めた頃、ニワ里ねつと会員の近藤健一氏より、「羽黒村銘のある瓦を数点みつけた」との報告をいただいた。社寺などで屋根瓦を修復した際に、それまで葺かれていた鬼瓦を降ろし境内に保管している場合があるが、こうした瓦に「羽黒村」銘が記されていた。ご子孫への聞き取り調査においても、羽黒村、池野村の瓦製造に関する史資料はほとんど得ることができなかったため、これから資料の存在は、生業を伝える貴重な存在であるといえる。

現在把握できている羽黒村銘のある瓦類を以下に紹介したい。なお、近隣社寺の悉皆的な調査はしておら

ず、今後の調査によつては類例が増える可能性も期待される。

A) 立圓寺の鬼瓦

・所在地 犬山市羽黒小安40

・点数 鬼瓦1点

・銘文

明治十三庚辰八月吉祥日

余語代次郎藤原凡延作之

・写真 6・7

B) 津島社の鬼瓦

・所在地

丹羽郡大口町秋田1丁目106

・点数 鬼瓦2点

・銘文

愛知縣尾張国丹羽郡

羽黒村

瓦業余語代次郎製

明治二十七年甲午九月出来

(他1点は4行目が「瓦焼業」となる)

・写真 8・9

C) 徳授寺の鬼瓦

・所在地 犬山市犬山南古券232

・点数 鬼瓦1点

・銘文

丹羽郡羽黒村字赤坂

余語金太郎製造

明治廿九年丙申十月 吉日  
・写真 10・11

D) 全徳寺の鬼瓦

・所在地

丹羽郡大口町余野2丁目205

・点数 鬼瓦2点(2点とも同文)

・銘文

丹羽郡羽黒村

瓦屋代次郎製造

明治三十一年戊戌五月出来

・写真 12・13

E) 桑田小学校の鬼瓦

・所在地 犬山市字城山97番地

・点数 1点

・刻印 池野村 瓦屋忠八 富士組

・写真 14・15

資料A)・D)は羽黒村の余語氏による作品。D)は、余語の名はないが、A)、B)などから同じ余語氏によるものと推察される。C)からは、余語氏が羽黒村の赤坂で製造していたことが分かる。現在、羽黒の赤坂には「余語」家が数軒あるそうだが、瓦窯があったという情報は得られなかった。古い段階で製造を止めているか、もしくは余語氏は

鬼師など職人であつて、製造所(窯)

を所有していなかった可能性が考えられる。資料E)には富士組の瓦屋忠八とあり、前節dの製造所によるものであろう。初代の忠八の名が入っていることから、明治期の作品ではないかと考えられる。桑田小学校は、明治41年に旧地(犬山市字若宮)から現在地(犬山市字城山)に校舎が移転し改築されているが、その際に屋根から降ろされたのかもれない。また、本稿では取り上げないが、bの製造所による鬼瓦も犬山市内の寺院に安置されている。

5. おわりに

以上、羽黒村・池野村の近現代における瓦製造の状況を、散在的ではあるがまとめてみた。当地においては、明治・大正・昭和にわたって瓦製造が営まれ、小規模ながら地場産業として定着していた様子を窺い知ることができた。

今回取り上げた羽黒村・池野村の瓦製造のように小規模な産業の場合、たかが数十年前の事柄といえども一度廃れてしまうと、多くの情報が失われてしまうものである。実際に作業時の様子を知るのは70代以上

の方がかるうじて見聞きしている程度で、製造に関わる史料はほとんど得ることができなかった。しかし、地場産業の歴史は、その土地を語る上で不可欠な要素だろう。まだ聞き取りができなかった製造所もあり、引き続き調査をしていきたいと思う。

本稿を作成するにあたっては、以下の方々、団体にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

奥村欽治 長岡昭雄 奥村勝視

奥村文秀 長谷川文雄 津守道夫

齊木淳一

立圓寺 徳授寺 全徳寺

犬山市立桑田小学校

【註】  
・5人以上50人以下の工場を示す。

【引用・参考文献】  
愛知県総務部統計調査課編 1936 『愛知の窯業』  
商工省編 1932 『全国工場通覧』 日刊工業新聞社

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1987 『犬山市資料第3集(犬山城物語)』 犬山市

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1989 『犬山市史 史料編六(近代・現代)』 犬山市

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1995 『犬山市史 通史編下(近代・現代)』 犬山市

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1995 『犬山市史 通史編下(近代・現代)』 犬山市

## NPO 法人

にわ  
古代瀬波の里・

文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸  
(NPO 事務所)

〒484-0084

犬山市大字犬山字南古券 272

TEL:0568-90-3744

FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園  
ガイダンス施設

〒484-0945

犬山市字青塚 22-3

TEL:0568-68-2272

《ニワ里ねっと HP》

<http://niwasato.net/home>

《木之下城伝承館・堀部邸 HP》

<http://horibetei.com>

SNS でも情報発信しています。

《facebook、X、instagram》



## 【ニワ里ねっとと会員募集】

ニワ里ねっとの活動にご参加・ご支援していただける方を  
広く募集しています。

### 〈賛助会員 又は 正会員〉

個人・団体：1口 3,000 円から

- ・賛助会員は事業企画への寄付を前提（総会議決権を放棄）。会報の送付を含めて、他は正会員と同じです。
- ・正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

### 〈入会の流れ〉

- 1) 青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付  
申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。
- 2) お振込（郵便振替口座）による受付  
新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等を必ずご明記ください。  
手数料は各自ご負担お願いいたします。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

### 【郵便振替口座】

口座番号 00850-9-198552

口座名称（漢字） 特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

口座名称（カナ） トクヒ コダイニワノサト ブンカイサンネットワーク

### 〈ご案内〉

- ・会員期間は5月の総会から次の総会日までの一年間
- ・口座振込確認後、ご住所に会員証等を送付させていただきます。
- ・「会報 さとの四季だより」を年6回程度配布。ニワ里ねっとが実施する事業などの情報をご案内します。
- ・会員証に「参加印」をためると、オリジナルグッズをプレゼント！

上記口座にて、寄付金も受付けております。

ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。

## 研究紀要 第12号

niwa  
瀬波

### 《編集・発行》

NPO 法人

古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

### 《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

### 《発行日》

令和7年5月17日

私たちと一緒に、  
文化遺産を活かした  
まちづくり活動に  
参加してみませんか？



2025  
第12号